

「先生、そこで御座います、もしこれが妾の手で、その事實を押へて、見現はしたものとすれば、まだしも、妾一人の不運を犠牲にして世間への面目も保てますか、口惜しい、残念な事は、先生、先方から顯はして來ましたので」

「ふむ、先方から顯はして來た、そりやア、どういふ工合に」

「先方と申しても、流石に、その女房からでは御座いませぬ、その亭主が、だしぬけの不意に先生、出刃庖丁を持つて、加之も良人の不在中、暴れ込で來ましたが、妾は其時まだ多少、自分の良人を信じて居りますから、それも他の事と違つて現化、まる一年半も生殖器不能といふ病氣で、たゞ口ばかりの病氣でなく妾に對しての事實上、また絶えず醫者へも通つて居りますもの先生、まさか、よもや、さういふ筈がないと」

「いや、ないと信ずるのが當然だ、妻としては、貴女としては一點の疑ふべき餘地もなく巧

みに、事實の上に欺かれて居るんだからね」

「ところが先生、その亭主に、争へない動かせない證據を、すらりと眼前に並べられて、向直られた時の、妾は、先生、どうなります、お察し下さい、その上この始末を、世間へは勿論、自分の兄弟にも、いへない、この残念な、無念な、口惜しい馬鹿々々しい、善後策を、つける役目が先生、この妾で御座います」

大島院長、おもはず首を縮めて、閉ぢたる目を開きながら、聲を潜めぬ、

「なるほど、人の妻としては實に堪難き苦痛の極だ、いはど殆ど遺憾なき侮辱を蒙りましたな、加之も其、その善後策を付ける役目が貴女とは、あまりに残酷だ、あまり馬鹿々々しいが、その馬鹿々々しいところに寧ろ立派な貴女が、顯はれて居ますよ、自分の不運は別

問題として、その堪難き苦痛の極を忍び遺憾なき侮辱を受けながら、なほ良人のために盡した貴女は、たしかに立派な妻だ」

「先生、私は、かやうな事で、譽められたくは御坐いません、たとひ世間から、わるく、いはれても、いかなる冷酷な攻撃を受けましても、暖かき一家の圓滿さへ保ち得れば」

「そりやア、さうですが事實、既に保ち得られない貴女としては、その苦痛と慘愴に同情を寄せるの外、呈する言葉はありません、ところで、どういふ工合に善後策を付けました」

「先生、妾としては外に、手の付けやうが御座いませんから、残念ながら、やはり金で、いくら出しても金は惜しく御座いませんが先生、飼犬に手を咬まれて、その咬まれ代まで、取られた上、一年半も欺かれた良人のため、さんざ世話した奴に先生、手を支えて、頭を下けて、謝罪いたしました」

「や、きけば聞くほど實に、お氣の毒な次第ですな、しかし金で済ましたか、つまり金で、その金を先方の亭主が、受取りましたか」

「はい」

「ちよいと、お待なさいよ、先方の夫婦は元來、貴女の世話になつた、夫婦で、その亭主は現在、同じ會社で貴女の良人に使はれる目下のもの、その女房も常に絶えず貴女の許へ出入するもの、そして貴女の良人と先方の女房と、加之も其亭主が出刃庖丁を持つて不意に暴れ込んだほどの騒動が幾何にしろ、たゞ金で、無事に、はてな、聊か變だ、もしや萬一、先方の夫婦が相談上の仕事ではありませんかね、俗に所謂美人局なるもんぢやアありませんかね」

「いへ先生、妾も一時、實は、さうかと存じましたが、強ち、それでも、ないらしい點が御

「坐います」

「背女の品性から割出して、さうでないと、いふ外に事實、さうでない確實な證據がありませんか」

「別段これといふ、確實な證據を、並べ立てる事は出来ませんが、つまり先方の夫婦と、妾の夫婦と對照して、かういふ工合になるべき理由が、あるやうに考へます」

「はよア、どういふ理由です」

「その理由が先生、猶更ら妾の身に取て、堪へられない苦痛で御坐います、もし先生が今、仰しやツた美人局といふやうな、單純な事であれば先生、いくら殘忍な良人にも多少の後悔を與へられますから、結局、これほど苦しい事は御坐いません、妾が良人に欺かれて居た如く、妾の良人が先方の夫婦に欺かれて出来た事なれば先生、決して怨恨も何も御座い

ません」

「いはゆる美人局なるものでないとすれば、先方の夫婦は全體、どういふ夫婦です」

「そこで御坐います、先方の夫婦は先生、よほど性格の反した、權衡の取れない夫婦で、その亭主は俗にいふ意氣地なし、わるく申せば男として活動力のない、殆ど馬鹿に近い人間ですが、その女房は案外また飛放れた美人で、うき世の萬事に氣の利た女で、つまり世間普通の目からは、あの亭主に惜しい過ぎもん、とでも申すので御座いませやう、現在、平生に妾へ對しても、おりく溜息を漏して、自分の不運と亭主の不足ばかり訴へて居りました、くらるですから、實は妾の良人でなくとも、自分の亭主以上に出來たものが、もし何等かの動機で近寄れば、無論、必ず、きつと先生、間違の起るべき女で御座います、加

之も根が系統の賤しい品性の低い無教育の女ですから、人に過ぎた容色と小才のあるだけそれだけ猶更ら自分の亭主に絶えず不満を抱いて、その不満の消滅を頻りに他へ求めたものかと存じます」

「なるほど、品性の下つた女としては、よく世間にある例ですな」

「ところが先生、不幸な事には妾の良人もまた妾の性格と理想に反した、いはど物質的たゞ一點張の人で、世間の普通以上、衣食住の贅澤さへ與ふれば、その外に何をしても構はない、それで妻なるものに不足のない筈と、いふ人間ですから、どうしても勢ひ、平生に妾へ對して、それより上の愛が御坐いません」

「はよ、困りましたな」

「その物質的の、愛、實は愛といふもので、ないと思つて居りますが妾の良人としては、やはり愛でしやう、その單純な物質の愛が先生、自分の亭主を馬鹿にして常に不足の絶えぬ虚榮心の強い先方の女房へはどれほど、無上の幸福に映じましたらう、いかに羨ましく思つたでしやうか、つまり妾の良人としては、これ以上の妻に對する愛はないといふ、その愛が妾の性質上、あまり嬉しくないから自然、ありがたく思はないところを、先方の女房が自分の亭主に不満の極、もはや恩も義理も人情も忘れて仕舞つて、捨てと仕舞つて、申さば妾の良人と先方の女房と同じ性格の一致した點が、互ひに近寄つたものと存じます」

「や、わかりました、して見ると、貴方の良人も物質的の人で、先方の女房も物質的の女でその餘りあるものと足らざるものと、いはど有無相通じた次第ですな、しかし双方に妻あり亭主ある以上、たゞ男と女が有無相通じたでは濟まない、家庭の悲惨、人道の罪惡だ、それを金で泣寝入つた先方の亭主は兎も角、貴女としては、その良人に對して今後、どう

いふ覺悟を持つて居ります。甚だ露骨に立入るが、その姦通沙汰の一段落を告げた後、貴女の良人は今なほ貴女に對ふて、生殖器不能といふ残酷な虚偽を事實の上に持續して居られますか」

「先生、それを、その事實を申上げるまでもなく、その姦通沙汰の一段落を告げました後、妾は、離縁を請求いたしました、もし離縁が叶はねば生涯、別居したいと迫りました」

「たゞ離縁でなく、たゞ別居でなく、その堪難き苦痛の極を忍び遺憾なき侮辱を受けながらその善後策を付けて置いてその上の請求とすれば、いかにも貴女に無理はない、處で、貴女の良人は、どういふ工合に出られましたね」

「先生、離縁も別居も許してくれません、許さずに置いて、やはり事實は離縁と別居、より以上の苦痛を、今も受て居ります、のみならず先生、この苦痛の中へ、この悲惨の中へ妾の

母親が、義理の親でもなく眞實、この妾を産だ母が、妾の身を責めに、参ります、つまり妾は親と良夫に責め殺されるやうに、生れて來たもので御座います」

大島院長、ますく眉を擧めて目を閉ぢながら、いよく堅く腕を組みぬ、

「貴女の良人が貴女に對する事は、もはや既に、わかりましたが、貴女の母として貴女に苦痛を與へるとは、どういふ理由です」

「先生、うみの親で御座いますもの、その子と生れて、苦しむ事が孝行にさへ、なりますれば、どんな辛い堪忍も致しますが、妾の母は、出來る孝行も仕たい孝行も、さしてくれません」

「はてね、出來る孝行を、させない、仕たい孝行も仕られないとは」

「たとひ三度の御飯は、いたどかすども日に一升以上の酒を飲んで、いくら著せても仕送ツても年が年中その身に襦袢を纏ツて、酔へば誰彼なしの相手、喧嘩口論、醒めた時は花弄の賭博より外に藝も能もない人間、それで今年六十一といへば先生どういふ、賤しい下等社會に持餘された泥酔老爺かと、思召しやうが、實は先生、これが妾の母で御坐います」

「ふむア、貴女は實際、さういふ人の子ですか」

「嘘にもせよ子でない、母でないと申上げたう御坐います、眞實、産だ母に相違御坐いませ、生まれた子に違ひ御坐いません、その母が先生、せめて遠國にでも居りますれば、まだしも、無理な手紙で責められ出来るだけの金を送ツて濟みますが、この東京に居られて、三日目か五日目には必ず、わざと見苦しい風俗で妾を苦しめに、まゐります、泣いて拜むやうにすれば、するほど猶更ら押掛けて来て、内々そツと妾へでも、いふ事か、さらぬだに

妾に愛のない良人へ對ふて、加之も良人に來客のある時は却ツて僥倖に、大きな聲で、先生、お察し下さい、もしこれが今の地位にある良人へ嫁した妻なら、すぐに叩き出されて結句よいかも知れませんが、先刻も申上げました通り、不束ながら良人を今日の地位に致しました事に就ては、良人に關係の方々はいづれも能く御存じですから、いくら離縁を迫ツても別居を迫ツても許されない、その良人に一年半も欺かれて姦通の後始末までさせられて一句も出ない妾は實のところ、かういふ母があるためで御座います、この母さへなくば、いかに何でも、かくまで残忍の所爲を受けた良人の下に、生きながらす屍とはなツて居りません、つまり妾はあるとあらゆる世の中の不運に縛られて動きの取れない上を、良人のために殺され母のために殺されて居りますが先生、この死骸を、どうすれば、どこへ葬れば、よろしう御座いますやう」

良人のため母のため精神的に殺されてもはや現世に生甲斐のない此屍をいづこに葬りませうかと、問はれし大島院長おもはず容を改めて、我にもあらず俄かに嚴肅の態度を示しぬ、
「不幸も不幸、不運も不運、實に悲惨の極ですが、生きた人間として存在すればこそ苦痛も煩悶もある筈ですが、既に良人のため母のために殺されたといふ貴女は、其まゝ殺された覺悟で居られませんか、つまり貴女の言葉で屍になつたといふ、その屍となつた以上は貴女の無い道理だから、どこへ持運ばれやうがどこへ葬られやうが、もはや他に向ふて訴へる事はないぢやありませんか」

「先生、そりやア先生、あまり残酷で御座います、さうざ良人と母に苦しめられて、この上の遺憾なき残酷な目に逢つて来た、いや現在まだ逢つて居る身ですから、せめて先生に」
「そこだ、その點です、もはや殺されたとか、死だとか、屍とかいふ貴女の言葉を其まゝ受けて、不本意ながら今のやうに冷かな、御返答を仕たが、なアに現在まだ身に苦痛を感じて他に残酷を訴へられる餘地のある以上は、殺されて居ない、死で居ない、どうせ楽しく嬉しく生きて居られまいが、辛くとも悲しくとも、貴女は確實に生きて居られるンです、決して屍ぢやアない、先刻より段々お話しのお話を聞くに、つまり貴女は教育があつて、生來の神経が過敏で加之も萬事に負け嫌ひの勝氣な點があるやうだから、なるほど苦痛は堪難い苦痛に相違ないが、その苦痛を實際の程度以上に、いはゞ婦人の通有性を過度に飛越で、あまり深く激しく感じ過ぎる點があるらしい、ぶツても叩いても音のない痴鈍は猶更ら困るが、また自分の大切な神経を間斷なき人生の事々物々に觸れて、寧ろ迫られておまけに代價以上の支拂を仕過ぎて困りますよ、人の頭腦は實に油斷のならない危険なも

ので、精神病者の十中八九は收支相償はざる銀行の内部と一般、つまりない事に資本金を出し過ぎるからです、人間の豪いとか強いかいふのは、つまり少い資金で巧に多く、高價な物を買入れるやうなものですから、なるべく氣を大きく持つて、世の中を悲觀せぬやう、無理にも樂觀的の方面に、無理といへば無理ですが人は習慣性の動物だ、始めは嫌でも強て其方面に向へば、いつの間にか自然と近づきますよ、まよならねばこそ浮世なれといふ俗諺は、古昔より幾多の苦痛と悲慘を音もなく引受けて居りますから、ちよいと試みに貴女の不運を投じて御覽なさい、案外に底が深いやうですぜ」

「どう致せば先生、妾の不運を投じられます」

「さ、その投じ工合を、これから貴女に教へまじやう」

聞くだけの事情も聞き終りし後、あらむかぎりの同情も寄せし後、もはや運命の外に解釋の餘地もなく、もはや涙の外に慰むべき言葉もなければ、暫し眼を閉ぢし大島院長、こよごと思ひ切つて最後の斷案を下しぬ、

「つまり人間といふものは、何等か常に絶えず外來物に刺戟せられて、これと戦はねばならない筈の約束に生れて来たもんだから、どうせ苦しい方が多い、逆も生涯を通じて快樂ばかり取る事は出来ないが、貴女は今日の其苦樂の多少問題でなく、程度問題でなく、たゞ絶對的に苦しめらるゝのみで過去にも將來にも一點の楽しい光明が、ないといふんでしやうね」

「無論、先生、そこで御坐います、苦樂相半するといふやうな、贅澤な事は到底、私の運命として望みません、また快樂が少くて苦痛の多いぐらゐならば、先生、世間普通、まして

良人で御坐いますもの、母で御坐いますもの、妻として、子として、堪へ得らるゝだけは堪へますが、現在また今日まで堪へて、まゐりましたが」

「もはや、どうしても貴女、堪へきれませんか」

「はい」

「や、わかりました、いよく堪へきれないとすれば、良人に對する妻でなく母に對する子でなく、貴女は貴女、たゞ一個の婦人として、どこに何の關係もない一個獨立の婦人として、自分の思ふがまゝに所決する外アない」

「どう所決いたせば、宜しう御坐いませう」

「最も卑近に苦痛を脱せんとすれば、貴女、總ての婦徳を抛つて、墮落なさい、もはや貞も孝も不用だ、到るところ手當り次第に身を持崩して、すきな男でも拵へて思ふがまゝに墮

落するが宜しい、また最も高尚に苦痛を脱れんとすれば貴女、總ての煩悶を捨てゝ宗教界に身を投じなさい、人間の救はるべき道は人間以上の神に取縋つて慈愛を求むるより他に道がない、もし墮落が出来ず宗教にも這入らないとすれば、さういふ時に幸ひ人間といふものは頗る都合よく出来て居る、強ち自然の老衰を持つて斃るゝに及ばない、いつ何時でも人手を借らず死ねますよ、自殺なさい、どうせ來るべき死を早めるのみだ、鐵道往生、刃物三昧、水の底へ飛込でも木の枝に吊下つても、そりやア御勝手だ、つまり貴女として貴女のいふ如く、もはや妻として子として逆も堪へきれないとすれば以上たゞ三個の方法あるばかりだ、墮落するか宗教に救はるか自殺するか、どうなさる、もし今後、なほ堪へらるゝ餘地ありとすれば、さらに氣を大きく持つて、心を廣く持つて、良人と母のために泣かず叫ばず、不幸の極と不運の極より絞り出す貴女の眞心で、その良人と母を感化し

て御覽なさい、これ以外、貴女に呈する言葉はない、これかぎりの失禮ながら再び貴女の事情を聞く必用がない、いづれを取らるゝか、撰擇の覺悟は貴女にありますぞ」
 大島院長、ぬツと其まゝ立ちて、あとも見返らず室外へ去りぬ、

煩悶病院後編

院長の大島逸平と副院長の塚原要蔵、今しも午餐を終へて互ひにシガアの煙を吹きながら、身も心も打解けての談笑、俗にいふ樂屋談話なり、

「院長、今の婦人は随分、長く時間が取れましたね、どういふ筋です」

「つまり家庭の煩悶だが、なか／＼悲惨の事情が混入して出来事が單純でないところへ、本人に多少の教育があつて、加之も情より理の勝つた女だから聊か面倒だったが、まだ情よりも理の勝つた女だけに寧ろ最後の斷案は下し易かつたね」

「はよア、いかにも、その點がありますね、情と理と、いづれか一方へ傾けば既に中心を失つてるから、その傾いた方面を押上げて元の地位へ捻直せるが、情理ともに平均して常識

に飛放れた奴は到底、無効ですな」

「なアに、それにしても人間は生死の二途あるのみだ、生きてる奴に對つて死といふ問題を擔ぎ出し、死たいといふ奴に對つて何等か生きる方法を與ふれば十中の八九、まづ大定の事は解決するらしい、塚原さん、當院の秘訣は萬事一括して、こよさ、こよですよ、この點を心得て置いて貰ひたい、つまり人は最も手近な見易い道理に最も迂遠く深く迷つて煩悶するもんですからね、はよよよ」

「なるほど、はよよといほど人間生死の境を示した目標ですな」

「さやう、世の中に方角を失つて、どこへ行かうかと迷つてる人間のため、右左、さア生きるか死かといふ最後の決心を促す目標ですよ」

「しかし院長、右へも行かず左へも行かず、その目標の前に立往生して、生たくもない死た

くもないといふ奴は、どう取扱ひましやう」

「それが即ち入院患者だ、ほンやり目標の前に立たして置けない、當分まア病室へ入れて、ゆるく療治してやるのさ、だが塚原さん、その間に精神病院と煩悶病院の區別を立てる必要がある、つまり當院は常識と狂氣の中間で、精神病院は既に腐りきつた人間を收容し煩悶病院は將に腐らんとする人間を救ふんだから、實に面白いよ、頗る趣味がある、もし牛肉でいへば、あまり新しくて不可、あまり古くて不可、堅くもなし臭くもなし、こよ一日で腐るといふ最も美味のあるところだ、はよよよ」

折しも室外より慌たどしき小使の聲、

「先生々々、どちらか御一方、急に來ていたゞかないと困ります、大變な奴が來て居ります、べらほうめ錢を出して待つなア宜いが無價で人を待すといふ事があるか、さア乃公を一番

に療治しろつて吐鳴り散す亂暴な奴が舞込で居りますから」
きくや否、塚原要藏、すつと立ちぬ、
「そいつ、僕が當らう」

煩悶病といへば十中の八九、いづれも生氣に乏しく活氣に薄く、陰に閉ぢられて悄然と打沈むもの多き中に、これは案外また陽に開き過ぎて吐鳴る奴一人、俄かに患者の待合室を騒がせぬ、

そいつ面白いと副院長の塚原要藏、診察所に呼入れて見れば、ほろ張被に身を纏ひ破れし半股引に毛脛を現はして、土方でもなし車夫でもなし、職人でもなく立ん坊でもない四十男、うろく宵闇の軒下を歩けば必ず巡査の厄介になるべき風體ながら、人相の割合に何處やら

罪のないらしい奴なり、

「この病院の先生といふなア、汝さんですか、だしぬけに何も不足をいふんぢやアねエンですが、實アね、馬鹿な面アして今朝から茫然と待ってるんですよ、もう午後の三時だらう、考へて貰ひてエ、身體に閑暇があつて飯の喰へる人間ぢやアねエンですからな、働いて生てるんだ」

塚原副院長、おもはず満面の微笑、

「はア今朝から、それは氣の毒だ、なるほど、その日を働いて生きてる人間ぢやア少しの暇も潰せない、小使に氣を付けさせば宜かつたに、すまない事をしましたね」

「さうなにも先生、さういはれて見ると此方が濟まねエよ、はよよと時に先生、わつしも随分これまで人に負けねエ氣で、いろんな眞似をして、まアどうか斯うか不思議に野倒死

もせすさ、やッて来た事ア来ましたがね、もう無効だ、いよくいけねエ」

「どういふ工合に無効だ、いよくどういふ工合にいけない」

「そりやア無理だ先生、どういふ工合ッて、その工合が分りやア分別の出る道理で、いけなくも無効でもねえンですが、何を稼いで宜いか、どうして宜いか黒闇の寝惚ツ面で、わからねえから困るンでさア、兎も角も先生、助けていたゞきてエ、實ア手も足も出ず、かわいさうに、めんくらッてますよ」

「はよよよその助けるに付ても、事情を聞かなければ、助ける道がない、たゞ助けてくれでは困る、全體これまで、何をして居ました」

「鼠でさアね」

「鼠」

「人間を相手に仕ちやア、いちく瘡に障ッて、むかッ腹の立つばかりで、ろくも事アねエンですからね、鼠を捕ッて居ました」

「まるで猫だな、はよよよ」

「なアに猫ぢやアねエ、わッしの名は虎吉といふンですよ先生、この鼠もベストの盛な時は一疋が五錢で、わッしは當ッた事もねエが大した鬮があつたから自然と氣が勇んで随分わるくねエ職業になりましたが、此頃ぢやア、たゞの三錢で加之も福引なしさ、おまけに寒中と来てますからね、捕る方に骨ばかり折れて、奴さん穴に巢籠り仕たまんま出て來ねエ、どこの溝へ張ッても泥溝へ掛けても無効だ、一時は日に三十疋も占めて三五一圓五十錢にもなツたものが、今日ぢやア三錢の割合で八九疋が關の山だ、これぢやア先生、いくら眞ッ黒に泥を浴びて稼いで働いても、だらしのねエ山の神に三人の餓鬼を控へて、どう

なりますい、戯談ぢやアねエ、是非こゝは一番、本氣の沙汰で助けて貰ひたエ、實ア今日
だツて先生、さんざ朝から待たせられ、御蔭で、いやな事をいふやうだが、鑑一文にもな
ツちやア居ませんぜ、どうかして貰ひてエ

猫でなく虎吉といふ人間の鼠捕、ベストの消滅と共に鼠の相場も下りしのみか、寒中の巢籠
りに一日八九匹が關の山、これでは食へぬ、どうかしてくれといふ懇歎面、

「眞實だ先生、どうかして貰ひてエ、きけば金でも戀でも何でも凡そ人間それがために困ッ
てる奴を、助けるといふ病院ぢやアありませんか、ところが先生、わッしは別段、さう大
した金の御無心するでもなしさ、ねエ、また今更この年になつて色でも戀でもあるめエし、
そこア正直だ、見たまんまの人間相應に決して贅澤な御願は仕ませんよ、たゞ親子四人が
満足でなくとも、どうか斯うか其日を食へるやうにして貰やア澤山だ、なアに其うち夏が

來てベストが流行出しやア、また此方の世界だ、よし一番圖に當らなくツても、屹と何か
手土産をぶらさけて御禮に上りますさ、ちよいと今、この冬場だけのこツた、ねエ先生、
ドンなモンでしやう」

流石の塚原副院長も聊か閉口の體、

「はよよと困ツたな、いや話は、よく分ツてるがね、實は取扱ひに困ツた、はよよと」

「わからねエ相手と違ツて、話が分りやア先生、何も困る事アねエ筈だ、わざと難かしい無
理をいふぢやアなし、さう先生、ぢらさずにどうか仕て下せエな」

「いや、あまり分り過ぎて困るんだ、いはど殆ど問題にならないよ、少々、むづかしい混入
ツた無理のある方が却ツて扱ひ易いよ、はよよとしかし折角だから相談に乗るとして、そ
の鼠を捕る外に何か藝がありますかな」

「かわいさうに先生、これでも男の端に生れて来た人間だ、時と場合で仕方がねエから、やるもの、何も自慢で鼠を捕るのが、わっしの習った藝ぢやアありませんよ」
「こりやアわるかつたはよよとこで親子四人どうか斯うか其日を送るといふ、その送り料は全體、どのくらゐ入りますね」

「さうさね、ろくなものア食はないにしろ、やはり野宿もせずに生命を繋いで兎も角も生きてるんですから、どうしたって日に三貫の錢は入りますよ、たまに生臭い小肴の骨でも残す日にやア是非、四貫の上へ飛跳ねまさアね、ところへ此宿六が氣でも狂ッて、ほろ酔機嫌と来りやア山の神と三人の餓鬼は一日の干乾だ」

「なるほど、その中で酒を飲ンぢやア堪らない、まして三人の首枷を抱えた山の神どの、定めて苦勞だらう」

「ところが先生、わっしの唄アは變な女で、さのみそれを苦勞にして居ませんね、實ア互ひに好き合ッて、かうなツた夫婦ですからね」

「おい、のろけては不可」

「なアに先生、のろけるンぢやアねエが、まあ聞て下せエ、そもくの成立から、お話しないと分らねえ事があるんですよ」

鼠捕の虎吉、鼠の事よりも自己が唄アの事を問はれて、何とやら俄かに聲を潜め面を押し出し目を剥出しぬ、

「先生、たゞ一口に山の神といふが、この山の神にも随分、いろんな山の神があるもんですよ、ところで先生、わっしの唄アは全體、どんな唄アだと思ッて居なせえます」
「はよよよわからんね、まだ見た事がないから」

「見た事がなくツても、その亭主が現在、かうして目の前に居るんだから、おほよそ見當が付くでしやう」

「親子とか兄弟とかいへば、また想像の及ばん事もないが、夫婦は血統の違つた他人だからね」

「その他人が先生、親子兄弟よりも實ア縁の深え夫婦になるんだもの、猶更ら分る筈だが、困るなア、それぢやア話が出来ねえ」

「いや、出来ない唄アの話は強て聞く必要もないが、つまるところ、けふ當院へ来たのは當分、寒中の間、思ふやうに本業の鼠が捕られないから夏が来てベストでも流行出すまで外に何か、比較的、骨の折れない業で食ふ道を教へてくれといふんだらう」

「幾ら食へなくツても先生、そいつア酷い、鼠と唄アが一個になりますかね、まア兎も角も

聞て下せえ、實ア先生、わツしの唄アは長屋中で、わツしに過ぎた女房だといふ評判ですぜ、その評判も先生、きのふ今日の沙汰ぢやアねえ、そもく夫婦になつた最初ツから、や、友達の奴等、うるさく騒ぎやアがつてね、虎の野郎、うめえ事を仕たとか、あの唄アが無價で来たのが不思議だとか三年無事に辛抱するだらうかとか、は、よよよ無理もねえよ先生、眞實その通りだからな」

「眞實その通りの唄アが、どうしたといふんだ」

「どうも仕ませんやね、どうか仕られて堪りますかね、うそ虚偽のねえ證據は、わツしの種を宿して食ふや食はずの貧乏中で痛え腹から二人の餓鬼まで放り出した唄アですよ」

「はよよよなか／＼貞女もんだね、大事に仕なさい」

「そこで先生、さう思やアこそ、この大の男が、大猫も這入らねえ泥溝や溝の中を朝から晩

まで掻き廻して、わづか五銭か三銭の鼠を捕つて、一生懸命まッ黒になつて、どうか斯うか其日を養つてるンですよ、考へて見りやア、どうした何の因果か、この廣い世の中を撰りに撰つて先生、かあいさうに、わッしのやうな亭主を持たなくつても濟む筈に出来る女ですからね、よし大した希望はないにしろ、春秋に花が咲て演劇も料理屋もある世の中だ、襦袢を纏つた素肌乳香兒を背負つてさ、片手に泣て喚く餓鬼を引摺りながら、あまゝる片手に一貫か二貫の米や薪を提げて歩きたかアねえでしやうよ先生、一人の母親が死だ時せえ辻車は儲置、あの便利な電車にも乗らず、てく／＼駈けて往つた女ですよ、それを思ふと何故まア、わッしの噂アになつたかと考へてやりますよ、と言つて、他人の錢で車にも電車にも乗せたくねえ、虎の野郎に過ぎるもんだ過ぎもんだと聞く毎に先生、道理だと承知しながらも實ア氣が揉めて堪りませんよ、いくら噂アの方に間違がなくつても、あ

まり有難くない亭主に連添つた身を間違のありさうな奴等が四方から取巻て岡焼半分わいわいと騒ぐンですからな、危険でなりませんよ、先生、この上の慾は望まねえ、たつた一年で澤山だ、運よく捕捉らねえ盗賊でもして、噂アにも俄鬼にも思ふ存分、さんざ好きな衣裳も着せ、美味え食物も食はせて景色の宜い旅の空でも見物さした後、親子四人で先生、死で仕舞つた方が生甲斐もねえ生命を長らへて面白くねエ浮世に苦しむより、遙か優れた、どう考へて見ても此まゝ藻掻いて居たかア思ひませんよ、あゝ嫌だ、いやだ」

たゞ馬鹿抜ひに笑ひながら聞き居たりし塚原要藏、おもはず俄かに何をか恐れて容を改め、じろりと其顔を打守りぬ、

凡そ人間の怖ろしきものは才子の策にあらず智者の智にあらず悪黨の企謀にあらずして、ほつと突詰めし、馬鹿正直の一念にあり、今ことに鼠捕の虎吉、たゞ山の神に恍惚き宿六と思

ひの外、その恍惚さ加減が度を越して嫉妬に變じ、その妻に對する愛の極は世の中に於ける不安の極となり、その日を食ふや食はずの貧乏世帯は破れかぶれの自暴自棄となりて、もし一年榮華の夢さへ見れば親子五人の生命も入らぬといふ言葉に、塚原副院長おもはず眉を擧めて其顔を打守りぬ、

「なるほど、なるほど、いや、よく分つた、どうせ面白くない世の中を細く長く生きて居るより俗にいふ大く短かく、一時に樂んで百年の苦を脱れたいといふ理由だね、つまり盜賊してども嗚アや子どもに生涯一度の榮華をさしてやりたい、といふんだね」

「さうでさア、もう先生、世の中が嫌になりましたよ、いくら一生懸命に溝泥鼠を追廻したつて親子五人、逆も満足に人間らしい生命の繋ぎやうがねエンですからな、思ひ切つて地獄の釜の上を一足飛だ」

「うまく飛べるかね」

「そりやア其時の運次第だ、もし飛損へば釜の底へ落ちるばかりだ、仕方がありませんめエよ」
「自分は其時の運次第で、仕方がないにしても、嗚アや子供は何とか仕方のあるやうに、して遣なければなるまいぜ」

「だからさ、一年か半歳、この世に念の残らねえやう思ふ存分、さんざ贅澤さした上で、嗚アも子どもも一氣呵成に殺してやりませアね」

「その一年か半歳は、うまく盜賊の出來た上だらう、もし出來ない前に捕捉れば、どうする」
「さあ、そこですよ、そこを先生、何とか工夫ありますまいかね」

「ふむ、いよく本氣に、やる決心かね」

實ア先生、わつしだつて善い事と悪い事ア知つて居ますよ、盜賊なんか仕たかアありませ

ンがね、もし出来るなら、いつまで泥溝鼠を追廻して生死の境目に苦むより、いつそね、自分の身體を、ねエもンにしても、唄アや餓鬼の樂になる工夫は、あるめえかと考へるンですよ」

「さうだらう、まさか最初から盜賊が目的でもなからう、たゞ苦しませの餘儀ない結果、たとひ盜賊をしても唄アや子どもに樂をさせてやりたいといふ理由だらう、しかし實際また外に手も足も出さず、愈々本氣の沙汰に盜賊する決心なら、する方法を教へてやるよ」

「えッ、先生、そりやア先生、はよと戯談でしやう」

「いや、戯談でない、眞實だ、實は乃公の朋友に大盜賊があつてね、豫々その秘訣を聞いてよ、どうだ、出来れば遣るかね、やれば内々そツと其大盜賊に引合してやらう、なアに働いて正直な金を取るか、たゞで横着な金を取るかの相違だ」

塚原要藏そろく逆療治にかけて、この患者いかなる顔色を呈するか、その態度を窺ひぬ、

塚原副院長、わざと四邊を見廻しながら聲を潜めて、

「どうだ、いよく、やるかね」

鼠捕の虎吉、おもはず目を剝出しながら首を締めぬ、

「さアどうだ、いよくやるかと念を押されちやア困りますが、ねエ先生、やつても、ようがしやうか」

「善い悪いより寧ろ、うまく出来るか出来ないかといふんだらう、つまり面白くない世の中に食ふや食はずで泥溝鼠を追廻すよりは、いッそ盜賊でもして唄アや子どもに生涯一度の榮華をさしてやりたいといふんだらう、事の善悪は既に取退けての餘儀ない理由だらう、なるほど泥溝鼠を追廻す人間が今日の激しい生存競争に追廻されちやア堪るまい、日夜間

断なく襲ひ来る生活難の壓迫に堪へられないのが當然だ、生きて甲斐なき苦痛の結果、もはや死を待つより外にないが、せめて其死の前に一度、人間らしい境涯を妻子に得させたといふための盗賊、こりやア盗賊する奴の盗賊でないから罪が軽いよ、軽い罪のため重い人間の親子五人が死を決しての盗賊、や、無理はない、大きく云つて四海兄弟の有無を通ずる一時の方便だ、人の物を盗んで出まよの猫糞に済まさうとするから宜くない、なアに盗賊した後で此世を去るといふ死の覺悟さへありやア自然の申譯が立つてるよ、罪も報もあるもんかね、やるべし、やるべし、遠慮なく思ひ切つて盗賊しろ、幸ひ今いふ通り乃公の朋友に大盗賊があるから引合してやるよ、はよよよ」

鼠捕の虎吉、豆鐵砲を喰ひし鳩の如く、ばちく目ばかり剥出せば、塚原副院長、いよく聲を潜めて語り出しぬ、

「どうだい、やるかね、やれば今、すぐに其大盗賊へ引合さう、早速今夜から始めるが宜い」

「先生、わッしは、まだ、やるか、やらねえか決意ませんが、その大盗賊といふなア全體、どういふ人です、どこに居るんですい」

「實はね、當院に居るんだよ」

「えッ、この院中ですか」

「さうさ、うかく人に漏らしちやア困るがね、實のところここの院長だ秘密中の秘密、この大島院長といふのは、それだよ、儲かう打明した以上は、もう脱さない、もう動きが取れない、否でも應でも盗賊さすから、たとひ仕なくつても既に仕たものと見て、するものと見て今こゝへ院長を連れて来るぞ、もし院長の面前で、をかしく變に二の足を踏出すと貴様、無事に歸れない事が出来るぞ、暫く待つて居れ」

ずつと其まゝ立ッて室外へ飛出すや否、がちりと音高く入口の扉を閉しぬ、
鼠捕の虎吉、自己が鼠捕器に掛けられたる如く、一室に閉籠まれしまゝ出るにも出られず、
ここの院長が大盗賊とは、いかにも不思議の至極、もし欺して置いて巡査にでも引渡さるゝか
と思へば、俄かに薄氣味わるく腕を組で茫然とせる背後より入口の扉を開けて靴音高く、例
のブラシ髻に目鏡越の眼を光らす大島逸平、加之も突如の大聲、

「盗賊したいといふのは、汝かね」

「ちよ、ちよ、戯談ですよ戯談ですがすよ、いくら何だッて盗賊を仕たいと、わざ／＼此方か
ら頼んだ理由ぢやアねエンですが、今こゝから出て往ッた先生が、無理に盗賊しろ盗賊し
ろと仰しやるから、つい、その氣に、いやまだ實ア其氣にもなッちやア居ませんよ、とん
でもねエ、人を馬鹿に仕てらア、はよよよ」

「おい、おい、たゞ笑ッて済む事と思ッてるか」

「へエ」

「へエではない、現在、自分の口から盗賊をして親子五人が生涯一度の贅澤をしたとい、い
ふたではないか、のみならず一年か半歳、その盗賊金で贅澤を盡した後、妻子を殺すとま
で、たしかに言ッたらう、だから此奴、危険な奴と見て取て、わざと汝を引付けた理由だ、
實のところ乃公は大盗賊でも何でもない、寧ろ警察と或方法を以て聯絡を通じて居るくら
るだ、第一また汝の人相が、どうしても正直らしく受取れない、もし盗賊する氣になッて
出来る場合があれば、やりさうだぜ、實際まだ人の物を盗んだ事はないか」

「だど旦那、旦那、親子五人で年が年中の空腹を抱へちやア居ますが、この年になるまで塵
一本、人様の物を、目にも觸れた事ア御座いません、どうか旦那、この邊で御勘辨を願ひ

ます、今の方にだつて、わつしの方から何も、實ア言つたンぢやアねエンですよ、いはせられたンですよ、かあいさうに、根が馬鹿ですから、うっかり乗せられつちまつたンでさアね、や、この後は、これに懲りて旦那、手に取るまで外に氣を移さず一生懸命、眞面目に神妙に、うぬが性に合つた泥溝鼠を追廻しますから」

「眞實かね」

「眞實です旦那、かういふ酷い目に逢つた事アねエ」

「いや、眞實なら、それで宜い、こりやア實際の統計だがね、およそ盜賊して監獄へ這入つてる奴に、あれだけの苦役が一日平均二十錢に割當るものは無いさうだ、また今日の世の中は昔日と違つて銀行といふ便利な倉庫があるから、どんな家でも、金を多く扱へば扱ふだけ百圓と纏まつた現金を置く筈がない、ね、だから勢ひ物品を盗んで直ぐに捉捕るんだ、

また監獄で働く半分の苦役を獄外で正當に働けばいかなる仕事をしても日に五十錢以上はきつと取るから、どう考へても盜賊は差引勘定に合はないもんだ、また人間には人間相應、奈何せん癩に觸るが致方なく、それ々の運命といふものがあつてね、まづ世間普通の常態、智慧や工夫で、さう自由になるもんぢやアない、人間の智慧と工夫は、數の知れきつたもので、いはど自然に來る運命を早く引付けるぐらゐのこつた、わかつたかね、其うち氣を變て、また來なさい、盜賊するよりは、もう少し手數も心配もなく割の宜い仕事を教へてあげるからね、まづそれまでの間は、あまり自慢にもなるまいが手に馴れた鼠を捕るに限る、いくら不足はあるにしろ、鼠を捕つて今まで飢死も仕ないぢやアないか、東京中の鼠を捕り盡して一疋も居らなくなれば、その時こそ算盤も勘定も要らない、盜賊しても宜いがね、まづ當分、さういふ損な仕事にかよつては不可よ」

鼠捕の虎吉と入替りて、靜かに音もなく現はれしは年輩二十四五の小男、ちよいと遠目に色白優形の美男めけど、人間の血色を失ふて骨と皮ばかりの吹けば飛さうな體量、凡そ十貫目もあるか無いかの覺束なさ、無論、徴兵検査の時は問題にも入らずして其まゝ摘み出されしが、醫者の研究問題には生涯いつ何時でも合格すべき體、さりとて營養不充分といふでもなく現在に疾病あるでなく、これを上品にいへば天性蒲柳の質、これを實際にいへば憐むべし男子一人前の生れ損ひ、羽織は大島まがひの紡績飛白、襟垢の光りし伊勢崎銘仙に袖口の擦切れし紀州ネルの下着を重ねて、もはや伸縮のないメリヤスの竹筒に等しき古シャツを纏ひ、繩の如く糾れたる紬絞りの兵兒帯に爪頭の食出でし紺足袋、定めて下駄は上汐の吹寄せに似たるべし、奈何せん浮世の浪風に乗切る力もなく勢ひもなき身を悄然として椅子に凭たせ、

愁然として瘦せたる額に神經過敏の青筋を現はしながら、活氣を失ひし無言のまゝ目を閉ぢて差俯きぬ、

大島院長、じろりと例の目鏡越、

「貴君は」

「僕は、雲峰です」

「ウンボウ、お名前ですか」

「雅號です」

「どういふ文字を書きます、失禮ながら御職業は」

「雲の峰と書いて雲峰です、既に雅號といふ以上、これを單に職業と見られては、困りますが、文士です」

「ブンシとは」

「文士とは文士です、文を以て生命とするもの、文學者の事です」

「はよア、なるほど、此ごろ流行る文學者ですね」

「院長、變に妙な語氣を用ひられますな、いやしくも文學者といふ冒頭に、此ごろ流行るとは」

「いや、別に語癖を設けた理由ではない、つまり此ごろ世に尊敬せらるゝといふ意味で、つまり重く迎へらるゝといふ意味で、これを只お心易く流行ると申したのは、いかにも野卑に聞えて悪かつた、あらためて取消ますが、しかし貴君、何等か當院に要求、いや要求の一語また御氣に觸るかも知れないが、もし何等か當院に期するところあつて來られた以上、いちく、さう言葉の揚足を取つては困りますよ、はよよ兎も角も煩悶病院に對する文

學者雲峰先生の事實要件、事實要件も呵しいが、なるべく無用の辯に亘らず要領の本點に移りまじやう、まづ第一お聞き申して置きますが、いはゆる今日の文士とは、數の上に於て多くの場合、小説家の事でしょうね」

「さうです、現に僕も其、その小説家の一人です」

文士と稱する雲峰、みづから現代に於ける小説家の一人といへど、家は片々たる雜誌のガラツクに相住居の外、いまだ一部の出版物として洛陽の紙價に關せし事なく、おりく、滯り勝の下宿料に關して凡俗の侮辱を加へられ、さらぬも枯れたる腸を天下知己なきの歎に絞り果てよ、鏝一文の工夫も付かず、せめて半月分を持て歸らねば、いよく今日こそ宿を追出さるるといふ日なり、

大島院長、ますく目鏡越の眼光を輝かして、蒼く瘦せたる雲峰の面を打守りながら、殊更

に慇懃の口調、

「凡そ世の中に執る業も多いが、まづ貴君の如きは人間幸福の頂上、うるさい現實の物質に殆ど用がなくて、常に高く清い幽玄の理想界に居らるゝんだから、定めて社會の事々物々が見るにも聞くにも堪へない、卑しい淺ましい、なさけないものに思はれるでしやうね」

「そりやア無論、さうですが、一方には文士またパンのために生理的存在を繋ぐ必用上、遺憾ながら餘儀なき場合はをり／＼卑近な物質問題に近づかざるを得ない事がありましてね、どうも困ります」

「はよア、やはり貴君方でも、さういふ場合がありますかね、野卑な我々の想像では一切、すべて社會の物質外に立たるゝものとはかり信じて居ましたが、なるほど、さうですね、木や金で作った神佛にさへ食物を供へるんだから、まして生きた人間だ、いくら文學者でも小説家でも食はなければ死の外アない、つまり現在眼前のパンが已むを得ざる事實の先決問題ですね、はよよと、ところで其先決問題は平生、どういふ工合に、どういふ程度で、處理せられますか」

「實は院長、その點で、その事で、來たのですが」

「その點とは、パンですね、その事とは失禮ながら、そのパンを得る道のない事もないが、まづ骨が折れて困るといふ理由ですか」

「露骨にいへば、まアさうです」

「露骨が宜しい、世の中の實際は皮肉の言葉で行はれませんからね、時に貴君の御家族は幾人です」

「まだ獨身です」

「獨身、お一人ですか」

「下宿屋に居ます」

「ふむ、他に系累のない獨身で生活に世話のない下宿屋住居、お氣樂ですな、しかし其貴

君がバンといへば、たゞ一人の下宿料ぢやありませんか」

「その下宿料が、甚はだ面倒で、困まるンです」

「何が面倒なモンですか、立坊の木賃宿でなし、まさか日割で毎日、支拂する筈もないか

ら、月の最初か最終に一度、その一月分を拂へば済むでしやう」

「それが院長、なか／＼容易に濟まないから困るンです」

「はよよとして見ると困るのは貴君でない、寧ろ下宿屋が困るンだ、下宿屋の方からいへば

貴方は飯盜賊だ」

「飯盜賊」

「さやう、飯盜賊だ」

大島院長の目鏡越と雲峰の目鏡越、互ひに一種異様の光輝を放ち合ひぬ、

實際いまだ世にも人にも許されず、たゞ自己ばかり其氣の雲峰先生なれど、苟くも文學者を

以て任じ小説家を以て居るものが、下宿屋の飯盜賊といはれては侮辱の極點、くわツと満面

に朱を注いで怒るべき筈ながら、あはれや元來が骨と皮とに瘦こけたる貧血性、ます／＼蒼

白き面は神經過敏の青筋のみ立て、機關人形の電氣に打たれたるが如く、五體ぶる／＼と震

ひ出しぬ、

「院長、いゝ院長、僕を飯盜賊とは、どういふ理由で僕が飯盜賊です、下宿屋住居の文士は

僕一人でない、廣き意味に於て文學に對する侮辱だ」

大島院長、悠々たる態度に例のブラシ髯を撫で、満面の微笑、

「廣き意味に取ツても狭き意味に取ツても、そりやア貴君の勝手だが、さしづめ今、貴君ア自分一人の下宿料を拂ひ兼ると、いふぢやアありませんか、この拂ひ兼るといふ言葉は一の修辭法で十中の八九、實際に於て拂はないものが多い、ところで下宿屋は慈善業でない、最も單純なる營利的として貴君に其食料を拂はれない以上、つまり貴君のため食ひ倒された理由だ、まだ大道の屋臺店で鮨か天ぶらの喰通する奴は正直だが、そこで一月も二月も寢起しながら食ツたものを拂はないに至ツちやア實に言語道斷、けしからん太いもんだ」
「いや院長、下宿料を拂はないんでない、わり／＼その時の都合上で、拂へないんだ」
「拂はないと拂へないは、貴君の方に取つて其時の都合上かも知れないが、拂ツて貰へない下宿屋では、結局、やはり食はした代價が取れないのだ、いくら清く高い理想界に住で凡俗

の物質外に超然たる文學者でも小説家でも、その物質外の超然を下宿料にまで及ぼしちやア、あまり自分勝手に無遠慮すぎた業だ、はよよよいかに無用の長物を養ひ得る社會でも、事實まだ今日の文士なるものを尊敬して、無代で食はして置くほどの雅量がありますまい、はよよよ全體この文士に對する世間は文士みづから自己を見るほど重くは待遇して居ませんよ、實は寧ろ風船玉よりも軽く見てますよ、文を作るより田を作れと言ツてね」
「文を作るより田を作れ、つまり富を得よといふんですか」

「いや、富といふものは、到底頭腦の不節調にして性行の放縱散漫なる貴君方の得られるものでない、たゞ自己が生きて居るに就ての餌食を供する小金のこつた、よく貴君方の連中は清貧といふ事を自慢にするが、貧にして清きものは非常の豪傑か希世の君子にある筈だ僅が自己一人の存在に覺束なく下宿料を踏倒したり乃至また一家を構へて妻子眷族に味噌

醬油の心配さすやうな人間が、清貧の事實を行ひ得るもンか多くは是れ濁貧だ、第一また筆で飯を食ふのが間違だ、日本の飯は箸で食ふもンだ古人の屢々米鹽に窮して貴きは窮する外に於て何等か大に窮せざるものがあるからだ、今の文士に貧乏を自慢するだけの品性と大作物がありますか、彼等の所謂貧乏は餘儀なく迫らるゝ正當の貧乏でない世間の同情を惹くべき廉潔の貧乏でない、惡臭紛々たる糞貧乏だ、つまり貧乏神の方で嫌な氏子を持つたと迷惑して居ましやうよ、はよよゝわるくいへば貧乏神に持餘され死神に見放されて、それがために現世に生きてる人間だ、いちく今その證據を事實の上に擧て見ませう」大島院長、所謂今日の文士なるものを引ツくるめて一口に押し込み、下戸の空腹に團子の勢ひ、むしやくと喰ひしが、さて眼前に喰殘せし雲峯先生、これは案外あまりの不味さに、面を皺めて、手を付けず其まゝ打守りぬ、

「や、聊か大膽に饒舌り過ぎたやうですが、まさか鷺を鴉にしたでもない、鴉を鴉にしたぐらゐのこつた、大した間違はないでせう、はよよゝ時に貴君ア今後なほ、文士として世に立たれる覺悟ですか」

「無論です、今、院長の云はれた議論は平生も我々の耳にすると、さのみ驚いて珍らしくは感じません固より文學は世間の賣買物でない以上、いかに苦しくとも、いかに辛くとも、それがため我々の希望は断ちません、凡そ、世の中に於ける總ての苦痛と迫害に壓せらるゝとも、この文學の重き中心點は動きません、貧と戦ふて道に倒るゝは、人間光榮の極ですからね」

「なるほど、さういへば、實に清くて高い、人生この上もない光榮ですが、實際、あくまで貴君は其光榮を保ち得て其貧と戦へますか」

「實際、戦ひつゝあるンです」

「はよよ實際、現に戦ひつゝあるといふのは、つまり下宿屋の下宿料と戦つてゐるンでしやう、はよよあまり敵が小さ過ぎる、加之も連戦連敗、めちやくくに負けてゐるンでしやう、せめて社會に對する生涯の貧と戦へば兎も角、今日か明日かといふ自己一人の食つたものを拂へないやうぢやア殆ど問題外だ、光榮も品位もあつたもんでない、よろしく當分の間は文士を廢めて、蕎麥屋か鮎屋で出前持になつた方が宜いでしやう、全體、貴君方は貧の解釋を間違つてゐる、なるほど文學は不換金物で俗世間に價値を定めらるゝものでないとするれば、その貧を自己一身の貧に止めて晏如たるべしだ、自己の貧乏を他に及ぼして迷惑をかけちやア不可、つまり世間と貧と性質を異にして自分だけの貧を保つが宜い、世の中の俗物どもは鯛の刺身に舌鼓を鳴しても貴君方ア鹽を舐め菜ツ葉を食つて平氣に居れば、そ

れで済むんだ、卑しい物質と高尚な理想とは相容れないから、どツちか一方に男らしく決しなさい、第一まだ世の中にも立ち得ない文士の身として下宿屋住居は贅澤だ」

「院長、僕の下宿屋住居を贅澤とすれば、どこに住むんだ」

「下宿料も拂へない下宿屋に住むよりは乞食するが宜い、貴君の如き文士には文士相應の光榮も損せず品位も損せない乞食の方法はありますよ、や、幸ひ其方法を教へてあげましよう」

いかに名も實もない平凡文士といへど、下宿屋住居は分に過ぎたり乞食するに如かずとは、あまりに、手厳しき外科療治をうけて、むツとせし雲峰先生、ますく額に青筋を立てぬ、
「院長、苟くも文士に對つて乞食しろとは全體、どういふ乞食です、是非とも其、その乞食説を聞きたい」

大島院長、いよく平氣に満面の微笑、

「たゞ乞食しろといへば、なるほど貴君を侮辱するやうだが、實は尊敬の意味ですぜ」

「乞食が尊敬の意味とは」

「人が人に對ふて食を乞へば、これ世間普通の乞食で、社會に於ける一種の罪惡物、人間としての恥辱だから、この上もない無禮の暴言になるかも知れないが、今こゝでいふ乞食は天に向ふて食を乞へといふ意味です」

「天に向ふて食を乞へとは」

「つまり自己が食ふだけのものを働けといふ事です。但し筆で働く原稿料でない、みづから鋤鎌を執て耕せといふ事です、それも此ごろ貴君方の諸輩で一の流行語に用ひらるゝやうな手ぬるい兒戯的の田園生活ぢやア無効だ、すべて世の中の虚飾虚名を抛つて實際の土百、

姓になれといふんだ、今日まづ文士直接の衣食住を求むる新聞雜誌その他の書肆は勿論、凡そ生活の要求に就て人間を相手にせずいはゆる天の賜物を飢へず凍へざる範圍内で急がず慌てず悠々として自由に氣樂に心配なく得よといふ意味だ、國を守る軍隊に屯田兵あるが如く、神聖を保つ理想界にも屯田文士を見たいもんですよ、常に口と筆の上では最も高く清く俗世間に超越しながら、その事實は案外、この俗世間のために絶へず侮辱され迫害されて最も弱く脆く悲鳴をあぐるものは今日一般の文士先生だ、その外面の標榜を見れば癢に觸るほど生意氣に面憎く威張つてゐるが、その裏面の實際を見れば涙が滾れるほど哀れで氣の毒で、いちぢらしいもんだ」

「いや院長、その理論も講釋も聞くに及ばない、人間の職業には元來の體質問題が先決だ、加之も由來この文士には才子多病て蒲柳の質が多い、もし文士が土百姓に堪へないとすれ

ば、どうなるンです」

「そこだ、そこですよ、才子多病といふが、そりやア間違ッてる、實は多病なるが故に神經が過敏になッて才子らしく見へるのだ、特種の異例は格別、その證據は多病の才子に實際の大なる仕事を遺したものが尠い、また世間の通例、學者に蒲柳の質が多いといふのも、實は蒲柳の質なるが故に學問する奴が多いので、つまり健全の思想は健全の體格にありといふ定義が動かせない説です、だから文學者も小説家も身體の弱い奴は無効だ、いつ何時でも實際に土百姓の出来る人間でなくツちやア文士になり得る資格がない、さらぬも腦味噌を絞出て體質を弱くする文學だ、それを最初から瘦ッこけた蒼白い飢饉歳の螻蛄に等しい奴が一生涯懸命になッて堪るもんか、よし堪へるところで、いはど苦しまぎれに出る半病人の寢言だ、加之も此半病人が生存競争の激烈なる社會の中央で、自己の寢言を賣

ツて其代價に中流以上の衣食住を得やうとは、あまり虫が善すぎる、逆も出来ない相談だ、幸ひ貴君の如きは失禮ながら、露骨にいへば文士として大した名も聞かず、まだ深入して居られないやうだから、今のうちに思ひ切ッて他へ轉するが宜しい、もし今後なほ文士として世に立つ覺悟なら文士として市井の巷に餓死するの決心が必用だ、逆も貴君の身體では土百姓になり得ない、土百姓になり得ない貴君として其まゝで行けば、いくら闘ンでも力めても到底、卑近なる俗世間の生活難に勝つ事は出来ない、人間侮辱の極に壓殺さるゝ外はない、現在今ですら、自己一人の下宿料に壓迫されて手も足も出ないぢやアありませんか、これから一家を構へ妻子を持つて踏出す世の中は下宿屋の催促よりも、よほど残酷に無遠慮に手厳しいンですぜ、無事に生命を保つのは今のうらだ、もし文學上に貢献せんとすれば、食ふだけの事を他に求めて置いて、誠心誠意、何物にも煩はされず苦められず、

つまり原稿料でパンを得ない後、始めて高く清く大なる作物が出るかと考へますが、どうです、文學は賣買物でないといふ口の下から、すぐに本屋へ泣付て哀訴歎願的、原稿料の前借するやうぢやア、なさけない、文士も食はずに生きて居れないが、せめて食ふ道を半分ぐらゐ、原稿料以外に取る道がなくては不可、もし取る道がないとすれば、これを強て嫌な俗世間に求めず、求めたところが得られないから今いふ通り悠々と百姓するんだ、その百姓の出来ない奴は文學を捨てるが宜い、そもく今日の青年が自己の頭腦も體質も顧みず明りに文士を志すといふ事は、月賦年賦に自殺するやうなもんだ、はよよよ」

文士雲峰が大島院長のため土百姓の一點張に驚いて、あはれや何の要領も得ず其まゝ遁出せし後へ、入替りてテーブルを中間に相對ひしは副院長の塚原要蔵と藝妓の小冬、年齢は聊か女の春を過ぎし三十前後ながら、もはや浮世の裏も表も自由自在に通りぬけて、寧ろ花よりは一入の風情を添へし青葉がくれの色香くつきりと、牙渡りしのみか、あふるゝ自然の愛嬌には鬼でも蛇でも手鞠に取て來たらしい場敷女、藝妓も藝妓、たゞの藝妓でなく、いはゞ人殺しの罪深く出來たる藝妓なり、

「初めて、お目にかゝりますますが先生、どうか宜しく、お願ひ申します」

「やア、これは大敵だ」

「おや、大敵は酷う御座います事、何も先生、わざと出來ない御無理を願ひに出たんぢやア御座いませんよ、高が數の知れた藝妓風情ですもの」

「さア、その藝妓だから大敵だ、加之も生若い白粉臭い、初心めいた断出しの端た藝妓でもあれば兎も角、見たところは浮世の灰汁ぬけた洗ひ出で、たゞの藝妓でないらしい、一

見どうしても千軍萬馬の古兵だ、なか／＼ちよいと手輕に數が知れないよ、うか／＼すると此方が療治しられさうだ、危険々々、はよよよ」

「あら、先生、随分お人が悪い事ね、第一また妾どもに對しての御言葉が、あまり上手過ぎますよ、もし妾が尋常の藝妓でないと仰しやれば先生、貴君も尋常の先生で御坐いますまい」

「いや、たゞの鼠だ」

「たゞの鼠か、鼠でないか存じませんが段々と世の中が際どく逆倒になつて来て、うツかり此頃猫は油断が出来ませんよ、二十日鼠か舞鼠のやうな優しい、かわいらしい顔をした方が貴君、怖ろしいぢやありませんか、どら猫を餌食になさるんですもの、ほよよよ」

「おい、おい／＼、ふざけちやア困るよ、こゝは、病院だ、まして暢氣な待合でも料理屋で

もない、最も眞面目に人生の煩悶苦惱を引受ける病院だ、なるべく藝妓氣質の洒落をヌキにして貰たい、寧ろ野暮の方が宜い」

「ですがね先生、貴君だつて、あまり眞面目に野暮な方ぢやア御坐いませんよ、たゞの鼠でない、なんかと仰しやるんですもの、つい調子に釣込まれて、洒落たくなりますよ、ほよよ／＼」

「いや、相手が悪いからだ、ぢやア改めて接します、不肖ながら院長の代理に出た塚原といふものです」

「妾は賤い藝妓稼業を致して居ります小冬と申します女で、あら何だか急に變です事ね、初めて今日お目にかよつたんですが先生、どうも貴君は御馴染のやうな氣が致しますよ、どつかで先生、妾を御存じでしやう、きつと御見受け申した方に違ひない、塚原さん、はて

ね

「それが不可、さういふ餘計な事は、どうでも宜いから、第一まづ今日こゝへ來た理由を述べなさい、藝妓と煩悶病院實に面白い對照だ」

「先生、何が面白もんですか、世間の外面を笑つて通る藝妓だつて、人の知らない内證には辛い、悲しい事が御坐いますよ」

「や、そろく、眞面白になつて來たらしいね」

「眞面目になると先生、案外、沈み過ぎて、素人衆より浮かないもんですよ」

浮世の酸い甘いも舐盡せし三十藝妓の小冬、俄かに案外の眞面目となりて、寧ろ正直に野暮堅く言葉を慎みながら、しんみりと語り出せば、さて何處やらに垢を流しぬいた素肌の本調子、おりく強ねて唐突の氣焔を吐きぬ、

「ねエ先生、此ごろ身分のある方々が、妾どもの事を、たゞ一口に嚙で吐出して、醜業婦と仰しやるさうですが、藝妓といふものは全體賤しい家業は賤しい家業にしろ、それほど世の中に邪魔になる、あつて用のない、人間の屑でしやうか」

塚原副院長、おもはず眉を蹙めながら、靜かに腕を組み始めぬ、

「大變な議論を持出したね」

「別に議論ぢやア御坐いません、お伺ひ申すんですよ、勿論、昔と違つて妾どもの方にも、そりやア先生、随分お話にならない厄介な代物は多う御坐いますがね、それが多いからつて、たゞ一口に先生、醜業婦はあまり、御自分勝手に他を踏付けた酷い御言葉かと思ひますよ、價の割合に品の下つたのは強ち藝妓に限らず世間體を第一の當世風、いづれ様でも御同様に根を洗へば化の皮を丸裸に剥ぎ取つて、さのみ立派な御人體ばかり揃つちやア居

ませんからね」

「いや、眞實だ、今日の社會いづれの方面にも、その内容を探れば醜の字の潜んで居らない場所は無からう、紳士縮商といはれ貴夫人令嬢といはれ、乃至また慈善事業の下には寧ろ却つて罪の深い、外面に現はれない見苦しい事が多いやうだ、いかにも藝妓ばかりが醜業でない、しかし一體に當今の藝妓なるもの、實に甚だしく下落したねエ、も少し何とかして、その估券を保てないだらうか」

「下落した事は下落しましたが、實のところ先生、わざと藝妓の方から估券を下けたンでも御坐いませんよ、たゞさへ賤しく扱はれる家業ですもの、好き好んで誰が自分の價を落すモンですか、失禮乍ら今日の相場は、お客様の方から無理に引下したンです、客を相手の藝妓が先生、いくら高く止つて居ても無効です、つまり客で安もの買の當世、藝妓ばかりぢ

やアお齒に合ひませんから、自然と藝のない色の賣物が繁昌する理由でしやう」

「なるほど、さういへば實際、大に其邊があるらしいね」

「あるらしいぢや御座いませんよ、現在たしかに、それです、第一また妾どもを人間の仲間へ入れて下さらないで、汚らはしく醜業婦々々と先生、目の仇敵のやうに仰しやるのは殿方よりも女の方に多いやうです、勿論、殿方は假令どんな、立派な眞面目な物堅い御身分でも、實は内々あまり、妾どもに對して、さう大きな御口の聞けない事が御坐いますからねほよよと、つまり奥さん方の目から見ると、いかにも先生、こりやア御無理のないところ憎まれるのが當然で、うかくなされると大事の旦那様を、盗む氣はなくとも家業がら、ついね、そつと此方へ來て戴くやう、お招き申すんですから、しかし先生、どこまでも奥様らしい奥様に怨まれるのは覺悟の前で、一句もない理由ですが、さて當節の奥様に

案外 油断のならない方が御座いますよ、實は妾どもより、腕の凄い身持の悪い性質の下卑た、それこそ大變な奥様が居らっしゃるんですからねエ、實は開いた口が塞がりませんよ、どうです先生、わざと妾どもに御自分の旦那様を釣出させて置いて、その御不在中に俳優なつかを引入れるといふ大膽な奥様のある世の中です、これまでの俳優は藝妓を情婦に持つたちんですが當今の俳優は貴婦人といはれる方の御機嫌を取らないものは無いさうです」

「はよよよよほど癪に觸ると見えて、手厳しい八當りだね」

「なアに先生、之ちやアまだ立關口で、幾何か自分の身を顧みて遠慮してゐるんですよ、いよいよこれから奥の樂屋をすっぱぬいて見ましやう」

「おい、おい、さう露骨に手厳しく跳出しちやア困る、もう少し穩和に、あまり無遠慮すぎるとよ」

「だつて先生、癪に觸りますよ、妾が承知しても、考へて下さい先生、蟲が承知しませんよ」

「いくら癪に觸つても仕方がない、世間に對して弱味のある愛嬌家業ちやアないか」

「仕方がないと仰しやれば、豆腐が堅くツて石が軟和でも通る世の中、仕方ア御坐いませんが、實は人様に大口の聞けない弱い家業ですから先生、今日まで堪忍して来た妾どもですよ、しかし此ごろのやうに明けても暮れても醜業婦醜業婦と、頭から人間の仲間外れに扱はれちやア先生、いくら御無理御道理を虎の巻の藝妓風情だつて、さうは堪忍が仕きれませんよ、どこの馬の骨か牛の骨かと仰しやるかア知れませんが、人の子は雪の日の樽拾ひばかりぢやアありませんからね、加之も馬の骨だつて牛の骨だつて用に立つ今日、使ひ道に依

れば立派な細工になりますもの、生意氣に出過ぎた事をいふやうですが、もし待合と藝妓がなければ先生、公然より裏面に秘密の多い當舖がらの銀行も會社も政治屋さんも大變な御不自由なさいますよ、白晝の中央を馬車や自用車で、どんな眞面目な顔して居らしても、内實はね、ほよよ失禮ながら笑ひ度くなりまさアね、夫れで彼れは汚らはし、醜業婦とは、よくまア先生、平氣に、口から出たもんですねエ、この分では灰吹から蛇が出たり瓢箪から駒の出るぐらゐは當然ですよ、第一また其の紳士方に連れ添ッてる奥様風が凄まじい、あゝいふものに良人お手を觸れては御身分に關はりますの、いや御體面が潰れますのと、さも白々しう仰しやるだけに猶更ら妾どもの目で、その奥様の正體が見え透て堪りません、令夫人だッて奥様だッて先生、まさか雲の上から人間界に天降ッた方ばかりぢやないんでしやうね、随分お里の知れぬ、ねエ先生、もし妾どもを醜業婦にするなら、

するだけの事を先様でして、載きたいんですよ、殿方に限らず御婦人に限らず總體此節の方々は、無價で威張るから、癪ですよ、豪い方なら豪い方のやうに萬事、豪いところがあつて充分、妾どもに得心さした上、なるほどいふ威張方を仕て貰ひたいもんです、馬鹿馬鹿しい、する事も仕ないで誰が承知しますものか、さうぢやアありませんか先生、どう思召す」

「はよよまゝで乃公が窘められてるんだな、その不足を當院へ持て來られぢやア困る、聊か射る矢の的が違つてらだらう」

「違ッても違はなくッても宜いちやアありませんか先生、あきらめて堪忍なさい、どうせ弦を放れた以上矢面に立ッた御災難ですよ」

「いや、災難も宜いが、全體こゝへ何しに來たんだ、こゝは煩悶病院だぜ、自己の一身上」

「關する煩悶は如何なる煩悶も引受ける、但し他に對する癩癩玉は受取らないよ」

「あら、先生、すまない事、うっかり致して居りましたよ、實は自分の身に就て泣くにも泣かれない事で伺ったんですが、ついね最初の出やうが、變に妙な言葉の行掛上、かうなツた理由ですよ、ぢやア御免を蒙って、あらためて、これから自分の事だけ申上げます、なぜ妾は、こんな餘計な、お饒舌に生れたんでしやう、だが先生、あれだけの前口上を置かないと、きまりが悪くって自分の事を打明けられない性質ですから、つまり内氣なんでしやうね」

「はよよういかにも優しい内氣な女に生れてるよ、はよよよ」

氣も心も一本調子の俠肌、どこまでも藝妓氣質に出來たる女、四邊かまはず自己が腕にあるだけの癩癩玉を弾き出せば、案外また俄かに打沈みて眞面目の物語、

「ねエ先生、いつも古い文句ですが、藝が身を助ける不幸とは、よく穿つた言葉です、ねエ」
塚原副院長もまた眞面目の應對振、

「なアに不幸ではない、身を助ける藝があればこそ、さうして無事に居られるんだ、藝のため自分の落魄を救はれるほどの人間に、もし藝が無けりやア、どうする、現在その身を藝に助けられて居ながら、その藝に不足をいふ奴があるもんか」

「だって先生、なまなか藝があるから藝妓になるんですよ、もし藝が無けりやア破鍋に閉蓋、どうか斯うか身分相應の亭主を持つて、最初から堅氣の素人で通せますもの」

「はよア、やはり藝妓より素人の方が元來の希望かね、それぢやア問題の根底が違つてる、いかにも神妙な量見だ、しかし素人になりたければ、いくら藝があつても本人の心得次第で、すぐ素人になれるよ、なれないといふのは事實、なれないんでない、ならないんだ、今

「が今、すぐにも廢せるぢやアないか」

「ところが先生、これでも人の一代、さう團子細工のやうに手軽に行きませんよ」

「どうして」

「どうしてッて、さうでしやう、藝妓を廢めれば素人ですが、今更この妾が素人になつて、

どこに貰ひ手がありますものかね」

「あるともさ、大ありだ、無理工面の大金を掛けてさへ請出す奴の多い藝妓だらう、それが無償で嫁に行くといへば天下の馬鹿野郎、雲霞の如く争ッて來るぜ、はよよよ」

「戯談ぢやアありませんよ先生、大金を出して請出す藝妓は藝妓でも、そりやア當世風の年の若い面の美しい流行ッ妓の事ですよ、お座敷でこそ二十九か三十に通して居ますが、實は先生、今年三十六になりますぜ、いくら氣が張ッて居ても叶はない邊がありますよ、面影の

變らで歳の積れかし、もう貴君、色も香もない時候後れで、枝も幹も春に去られて仕舞ッた婆々アを、誰が喜んでくれますものかね」

「はよよよ先刻の勢ひにも似合ず、急に弱くなつたね、さう氣を落したもんでない、三十が四十でも女は女だ、なるほど色香は失せたかも知れないが、まだ枯木といふぢやアなし、加之も全盛を極めた妓流の果は、寧ろ一の名物として歓迎する人があるよ、全體、どういふ男が目的だ」

「さア、そこですよ先生、いくら歓迎されても相手に依りけりで、今この妾を喜んで、すぐ引受けてくれるやうな人は、實のところ、妾の方で少々、進みませんからね、なるは嫌なり思ふは成らぬ、まよならぬ浮世、どうしたら宜いでしやう先生」

「おい、ちよつと待ツた、また談話が變になつて來たよ、ふしぎに岐路へ外れて、捉捕どこ

ろがないやうだ、これぢやア困る、餘の事は暫く俵置で、つまり藝妓の小冬なるものが當院へ来た第一の要點だけを聞かう」

言葉の花のみ多くて實の少きは女の常、わけて人馴れし藝妓の場數女、あまり愛嬌すぎて更に要領を得ざれば、流石の塚原副院長も殆ど持餘しぬ、

「家業が家業だから自然の習慣上、どうしても言葉に綾があり過ぎて困る、つまり談話が上手すぎるよ」

「ほよよと譽められて叱られる理由ですね、ぢやア先生、かうして戴きましやう、先生の力から妾へなるべく、無駄のないやう、いちく問うて下さい、妾の方では問はれた事だけ眞面目に、お答えいたしますから」

「なるほど、それが宜いまづ第一、どこの生れだ」

「あら、まア酷い事、どこッて先生、そんな事を問はれて、少々嬉しくありませんよ、これでも種は本場の交りツ氣なし、女でこそあれ、憚りながら生ッ粹の江戸ツ子でさアね」

「そ、それが不可、萬事さういふ工合に出るから、つい餘計な口を聞きたくなるんだ、東京なら東京と、たゞ一言で済む筈だ」

「ぢやア東京、これで先生、よう御坐いますか」

「親は何を仕た人だね」

「阿父は大工の棟梁で、阿母は先生、やはり妾と同じ事、どうしても瓜の蔓に茄子は生りませんね」

「また始めるよ、簡單々々、ところで幾歳から藝妓になつた」

「さうですねエ、大體、阿父が大變な放蕩もんで、さんざ阿母に入れ揚げましたから、随分

と世間に巾の利た株も家も身代も無くして、妾が十一の時、其ころ柳橋で全盛の藝妓家へ下地ツ子で遣られました。十四の春お酌に出て、まづ人にも負けず相應の流行ツ妓になり始めたのはたしか十八九の頃でしやう」

「ことし三十六といへば、十四として殆んど二十餘年間だね」

「その二十餘年の間は先生、まるで夢のやうに過しましたよ、しかし夢ながらも無事に今日まで通して来た妾の身一人でお客の數は幾何、どれほどの家庫を潰しましたらう、たゞ馴染のお客ばかりでなく、その間に五度も請出された旦那が五人とも先生、生死の末が分らずなつて、立派な大家の影も形も無いといふ始末、思へば冥加の悪い家業、罪の深い身體です。ねえ、よくまあ殺されもせず濟んで来た事ですよ」

「いや、どんな夢を見て来たか知らないが、過去は過去に葬つて仕舞つて、現在の小冬なる

もの、そも／＼今日、まだ依然たる藝妓として當院へ来た要點は何だ」

「實は先生、口でこそ相變らず太平樂を並べて居りますもんの、此ごろ何だか急に氣が弱くなりましてね、第一この藝妓家業が頻りと厭になりました、長の歲月、今まで仕て来た業を考へると猶更の事、おり／＼自分で自分の身を賣められるやうな心持になつて堪りませんから、もし外に何か妾に叶つた相應の商賣でもあれば、教へて戴きたいと、それを伺ひにまるつたんですよ、どうでしやう先生、さんざ贅澤のあらん限りを仕盡して来た身體ですから、もう貴方この上の贅澤を望みません、たゞ人様の御厄介にならず食ふ道さへあれば、ありがたく神妙に守つて行く決心です」

「めぐる因果の小車とでもいふんだらう、そろ／＼年貢納めの時が来たらしいねエ」
塚原副院長、今までの態度を一變して、俄かに言葉を改めぬ、

「科學的の今日には用ひられない事で聊か抹香臭い説法のやうだが、實際、この人間には争へない自然の因果應報といふものがあるよ、いくら家業でも女郎屋とか料理屋とか待合とか、その他の所謂不生産的に屬する客商賣、つまり衣食住以外に於ける贅澤の家業で殆ど無事に三代の繁昌を續けた凡例がない、もしあれば必ず家の看板だけで十中の八九、内容は主人の變つてるもんだ、藝妓家業また同じ事で、無論、來る客の方に罪はあるが、相手の身代が潰れるばかりで納まらない、その罪の差引勘定、どうしても足りないところは此方へ報つて來るよ、まづ第一の證據は、ふしぎに全盛を極た藝妓ほど猶更ら老後が善くないからねエ、これが物の冥加に盡きるとでもいふんだらう」

「確實ですよ先生、さうでなくつても此ごろ急に弱くなつて、さんざ自分の仕て來た事に寢覺の悪いところへ、さういふ事を考へると、ますます陰に閉ぢられて、何だか妙に氣が減入るやうです、だから先生、妾も冥加の盡き切らない今のうち、この家業を廢めたくつて伺つたんですよ」

「それに付てだ、まづ世間普通、玉の輿に乗込む運がなくて、藝妓の出世といへば、寧ろ目的といへば、凡そ料理屋か待合の女將になるところだが、偕その料理屋なり待合が今いふ通りだからねエ」

「ちやア先生、何をしたら宜う御坐いませう」

「さうだね、今更ら急に飯炊も子守も出來まいし、さりとて此方の思ふやうに亭主も持てず産婆にも看護婦にもなれまいから、いくら外に種々する事があつても出來ない相談は無効だ、鰯の腐つたのは肥料になるが、そろく四十に手の届きかけた藝妓の捨どころ、こりア聊か困りもんだね」

「鯛腐腐ッたのは、酷い事、これでも先生、一時は小冬と唄はれた女です、せめて鯛の腐ッたぐらゐに見て下さいなねエ」

「はよよ、では腐つても鯛と見て、俵その腐り鯛だ」

「この腐り鯛を、どう致しませう」

「やはり外に仕方がないから、馴れた業に遠くない縁の近い事で、どうだらう、遊藝の師匠にでもなッちやア、無論、堅氣の町内へ這入ッて初志の娘ッ子を弟子に取るンだぜ、差當ッて外に相當の納まりは無からう、其うち何處かの樂隠居で、俗にいふ茶喫友達、世話する人があれば浮世を捨てた氣で、おとなしく世話になるが宜い、恰度こゝが早くなく遅くなく運命の境目で、その身の極め時だ、人間萬事、今一息といふ邊で退けば見苦しい終焉を取らない、この上に娑婆ッ氣を出して、おかしく變に若やいぢやア、ろくな事がないよ、

つまり小町の成の果だ、行末たとひ少々位ゐるの苦痛があるにしろ、さんざ今まで取越して来た贅澤と平均して見りやア、さのみ生涯に不足のいへない身體だらう」

「なるほど、さう承はれば、さうですなエ先生、自然の引潮に逆らッて見たところで、もう此年輩ですもの、うまく泳げる筈がないンですから」

「そこだ、その點に氣が付けば、まさか襤褸も下けまい、名物の落ちた末は却ッて無残なものだ、花は昔に皺くちやの梅干婆アが北風の門三味線に水鼻を垂らして歩くといふ、ものよ哀れは實際、よく世間にあるコツた、英雄回首是神仙と稱せらるゝ英雄豪傑でさへ、その首の回らし時が悪いと奈何せん、竟に名もない雑兵雑武者のため蹂躪られる例が世の中に多いぜ、まして高が藝妓だ、うかくすると路傍に倒れて區役所の假埋葬になり兼ない、御用心々々々」

名説を伺ひに來ましたよ、但し士百姓の一點張は既に雲峯より委しく聞きましたから、重ねて二度の御説法を乞ふに及ばない、どうか勦蹶の外に於て身分相應我々の取るべきものを拜聴いたしたいのですな、兎角この文士連中は御承知の通り、世間の狭いもんで、さつぱり筆の外に得るところがありませんよ、はよよよ」

實は自己が門下生の吹飛されたる復讐的に、をり／＼呵しくもない器械的の笑ひ聲を發して殆んど嘲弄的口吻、ふしぎに悉くこの字を帯びぬ、

「いかゞです院長、これちやア、あまり露骨的ですか」

大島院長、靜かに腕を組んで大嶺の顔を、じろりと打守りぬ、

「なるほど、流石に文士は文士、違つたものですな、總體この人間は他の事が見えても自分の事が見えない筈だ、しかし今、現在、貴方が貴方を知るの明に驚きましたよ、一點さら

に虚偽のない立派な自白だ、いかにも小説家は世間が狭くつて、さつぱり筆の外に取得がありませんねエ、いや、實は狭いのでない知らないんでせう、取得がないではなく、わからないんでせう、實際また世間の事が隅から隅まで廣く行き渡つて、いつ何時その筆を投じても自由自在にこの複雑なる社會に悠然と起てる程の人間であれば、寧ろ却つてあゝは盲目滅法の大膽に書けますまい、わからないで出来る藝だ、つまり嬰兒の惡戯と同じ理由だ、罪がない、これを天真爛漫といふのですな、はよよよ」

きくや否、大嶺先生、によきりと棒を呑だる如く、椅子を離れて起上りながら顔色を變へぬ、

「院長、いゝ院長」

大島院長、ます／＼沈着の態度、

「まアお掛けなさい、生理的の自然よりも精神的の作用で生きて居られる貴君のやうな體質

の人が、さう急に激しては宜しくない、甚だ危険だ」

實は一息に吹飛されたる門下生の腹癩に襲ひ來りし吉田大嶺、軽く大島院長を持上げて翻弄せむとせしが、ぶつしりと案外に重きに面を皺めて尻餅を搗きぬ、されど流石に雲峯よりは一二枚の上手、其まゝ脆くは遁出さず、わざと平氣に踏止つて出來合の苦笑、

「生理的よりも精神上の作用で生きて居るとは、我々文士に對しては深刻なる冷笑を與へられた意味かも知れないが、我々文士としては、實に感謝せざるを得ない言語です、いかにも我々は有形の肉體上よりも寧ろ無形の理想上に生きて居りますよ、聊か他の動物と違つた點がありますからねえ、はよよよよ」

大島院長、ますく沈着の態度、

「いや、決して貴君方を冷笑したのではない、實は同情の極、憫れんだ理由です、あまり單純

に罪の無さ過ぎるところを氣の毒に思つたのです」

「いくら院長の方で哀れな奴だ氣の毒な奴だと思つて下すつても、本人の我々は誠心誠意、これを天職と心得て、人間無上の光榮に感ずるんですから、その御心配に及びません、いはゆる他人の疝氣を頭痛に病むといふ事は、つまり其方の勝手で、はよよよ強て此方の願はないこつてすよ」

「なるほど、や、さういふ御決心なら別段、最初から問題に上さない事ですが、實に此間の雲峯先生といひ今日また貴君と云ひ、わざく師弟前後の御來臨には、いづれ必ず何等か深い煩悶でもあつての事と思つたからですよ、ぢやア貴君は煩悶病院に用のない方だ、つまり人間慘憺の裏面を引受ける當院に用のない人は幸福の生活です、まづ露店の古道具でも冷かす調子で來られたんでしやう」

「いや院長、まさか、さういふ理由でもないです」。

「ないとすれば、やはり貴君を患者の一人として見ますぜ」

「患者、どういふ患者と見ます」

「さやう、肺病人の死際に等しいやうなモンですねえ」

「面白い、この吉田大嶺を肺病人の死際とは面白い、こりやア妙だ、いかにも御見立が振つてる、御診察を願はう」

「實は診察するまでもない、もう無効です、いくら自分の氣ばかり確實なやうでも、到底、いけませんよ」

「はよア、療治が出来ませんか」

「なアに出来ないのではない、出来ても助からないんだ、徐ろに死を待つより外アありません」

ね、但し此病症ばかりは馬鹿も伶俐になるといふくらゐで、死に近づくと猶更ら神經が過敏になるから困る、實際もう貴君も長くはありませんぜ、しかし折角の御依頼だ、逆も効はないが、せめて病症の由来だけでも説いてあげまじやう」

兎も角も吉田大嶺といふ名を文壇に聯ねて、これを人間無上の光榮とし天爵の頂上とせる身が、その光榮と天爵を肺病患者の死際に見立てられし面相、もはや憤怒の度を越えて半泣の冷笑を帯びぬ、

「院長、療治の出来る出来ないは別問題だ、また強て願はないが、そもくこの吉田大嶺を肺病患者の死際に等しいとは、全體どういふ醫學上から割出されたか、その理論を聞かう」
大島院長、いよく眞面目に首肯さぬ、

「なアに理論でない、事實ですよ」

「その事實を承はらう」

「その事實は現在、貴君が證明して居るぢやアありませんか」

「どう證明して居ます」

「どうツて、苦しいでしやう」

「何が」

「病症そのものに犯されて、今や將に斃れんとしつゝある貴君がさ」

「いや院長、そこだ」

「どこです」

「こりやア、けしからん苟くも文壇に於ける僕を嘲弄するんですな、今の一言は」

「はよよさう曲解しては困る、苟くも文壇に於けるか於けないか、その點は門外漢として

知りませんが、我面前に於ける貴君は確實に認めて居ります、その貴君が、そこだといふ言葉に對して、どこだと問ふたんですよ、もし意に觸れば御免を蒙ります、しかし洒々落々として雅量のあるべき境遇に居らるゝ筈の貴君が、いちくかういふ小さい言葉尻を捉へて強く神経を刺戟せらるゝやうぢやア、心細い、それが即ち一の病的だ、加之も其病的が、よほど重くなつて居ますぜ」

「いや、そことは、そこだ、そこに大なる見解の違つた點がある、つまり院長は僕を以て最も重き病人と見るが、見らるゝ本人の僕は決して、さらに病氣でない、ない證據は吉田大嶺、いまだ會て自分に聊かの苦痛も感じませんよ、頗る健全です、遺憾なく達者です、寧ろ他よりは愉快に筆を執りつゝあるんです、貴族に生れず富豪に生れず其他一切の人物と虚榮を避けて、この文壇の人となつた幸福を日夜、感謝して居るんですからねエ」

「なるほど、日夜、誰に感謝して居なさるんです」

「誰、誰に感謝するって、つまり感謝して居るんです、感謝の念は強ち他に向って拂ふべきものに限りません、いはど我みづから我を誇りとして、自分が自分に感謝して居るんです」

「や、わかりました、これを高尚にいへば、自己が執る業を神聖として殆ど其道に殉ずると云ふ大自覚、いかにも立派な事になりますね、しかし、世の中は廣いあまり、我田に水を引き過ぎると溺れますよ、實際また一方からいへば、鼻持のならない手前味噌で、賣藥の効能書と一般、自畫自贊の甚だしいもんだ、所謂世間しらすの獨り自慢、井の底の蛙だ、わるくいへば壺羹の蛆虫その醜を知らずで、對照的の批評では鷹も飛べば、蚊も飛ぶの理で同じ飛ぶ上にも大變な相違がある、はよよつまり文士とか小説家とかいふ先生達の飛び工合が社會の平均上、どの邊まで飛べて居るか、その高さを實際の尺度に當てて見まし

「やう」

最初に嘲弄的態度を示せし吉田大嶺、いつしか顔色を變て四角張れば、最初に謹嚴なりし大島院長、今は却つて丸く洒落に打解けながら、テーブルの上に頰杖を突て満面の微笑、

「や、どういふ工合だったか、妙な調子で、貴君へ對する言葉の上に聊か敬意を缺たやうですが、今更急に改めてはよよ、お世辭もいへませんからやはり、行掛り上、暫時このまゝ御免を蒙りますよ、つまり露骨に無禮の繼續だ、はよよよ」

「なアに、わざわざ強て殊更らに心にもない敬意を拂つて貰ひたくありません寧ろ一種の好奇心を以て、その無禮を面白く聞きまじやう」

「これは案外、さう俄かに沈着て雅量を示されると、少々うち出し兼ねるが、試みに今いふ世の中の尺度で、いはゆる今日の文士小説家として居らるゝ先生方を」

「遠慮なく量つて御覽なさい、頗る興味のある批評だ、その社會の尺度で我々は實際、どのくらゐの寸に當ります、平均、どのくらゐの價値を世の中に占めて居ります」

「全體の程度を一尺と假定して置きませう」

「一尺、よろしい」

「その十分の一は即ち一寸ですな」

「一寸」

「いや十分の一は一寸ですが、その一寸の十分の一となれば」

「はよア、一分といふんですか」

「まだく」

「ふむ、一分にも及ばないと、いふ理由ですかね」

「さやう、すつと思ひ切つて大まけにまけたところで、まづ一二厘の邊でしやうなア」

「一尺の一二厘、つまり我々が世の中に於ける程度と分量の割合を百分の一か二に當るといふんですか」

「なるほど、世の中を一尺として、その一二厘は百分の一二に當りますね、こりやア大變だ、とんだ違算をしましたよ、大間違だ」

「でしやう、であるべき筈だ、いかに理事を解せざる門外漢の尺度と雖ども、まさか今日の我々に對して、はよよ社會に於ける其割合を百分の一二とはあまり勘定違も甚だしい、はよよ」

「や、何、間違は間違だが、さういふ意味に間違つたんでない、百分の一二に當ると聞いて實は驚いたのです、いくら最眞目に見ても今日の社會が貴君方に對して、その割合を百分の

「二も與へてくれる道理がありませんよ、千分の一二すら覺束ない、わるくすると零です
一よ、世の中の尺度に外れて居ますぜ、うかくくすると存在を認めてくれませんぜ」
吉田大嶺、豆鐵砲を喰ひし鳩の如く、もはや呆れて泣きもせず笑ひもせず、ばちくくと目ばかり剥出しぬ、

俗世間の外にありといへば、高尚幽玄の極、いかにも神韻に近く聞ゆれど、この世の中に存在を認められずといへば、侮辱嘲弄の極、油虫の死骸ほどにも扱はれぬ吉田大嶺、おもはず呆れて目を剥出す眞正面に、大島院長ますく打解けたる満面の微笑、

「甚だ露骨すぎて無禮な言を吐くやうですが、暫く手前味噌を取退けて虚心平氣で、まあお聞きなさい、凡そ物の價値は他に對する一般の比較上より打出さるよもので、人間の實際は賣藥の功能書にあらざる以上、いくら威張ッても騒いでも御本人の吹聴ばかりぢやア世

間が承知しませんよ、加之も社會は貴君方の專有物でない、貴君方に作られたものでないから到底、貴君方の自由にせらるゝ筈がない、案外此世の中は廣くて大きくて強いもんですよ」

「いや院長、そりやア大に見解が違つてる、つまり産出す根本的問題が違つてる、そもく我々は一般の俗世間より輕重を量られて、その秤り目の上るべきものでない、お氣の毒だが院長は院長だけの頭腦だ、この清く尊き文學を以て通り一邊の八百屋に對する芋か茄子を買ふが如く見て居るらしい、加之も我々は此社會を自己の專有物に仕たくもない、する必用もない、此人生を自己の天職に訴へて美化セんとする者だ光輝あらしめんとするものです」

「はよよそこが鼻持のならない手前味噌で、さらに效能のない田舎賣藥と一般、たゞ御本

人の吹聴に止まるのみだ、はよよいくら俗世間が癩に觸る文學者でも、まさか無人島では少々お困りでしやう、口では兎も角も現在の事實上、やはり人類群居の此社會を脱する事が出来ずまい、出来ないとするれば此社會に載せられた一分子で、その社會なるものは常に遠慮なく忌憚なく貴君方の輕重を量つて居ます、量る權利がありますよ、無人島は措置き、聞説く今日の文學者先生達は自分の住居ですら天井の鼠に驚いて青くなるといふほどの臆病だから、逆も夜半に墓原の一人歩行も出来まい、第一また此俗世間を脱して仕舞つては忽ち其日から貴君方は餓死だ、いくら書ても稼いでも原稿料が取れません、さらぬも瘦ッこけた文學者の乾物、あまり感心しませんねエ、かの首陽山に餓死した伯夷叔齊さへ川柳氏之を冷かして曰く、瘦こけた死骸があると蕨取、しかし文學者の死骸は蕨取も探し出してはくれませんが、わるくすると犬も嗅がない、はよよいや乃公は賣文の徒でない

と喝破されるかも知れないが、そりやア無効だ、どんな熱病の流行る時でも、さういふ勝手な熱は吹かさない、つまり貴君方の同人間に原稿料なしの無報酬で筆を執る人がありまするか、もしあれば無報酬でない、その原稿料が取れないから、取れる迄の間は已むを得ず、當分まあ自己の名を賣るためで實は苦しい半泣の執筆でしやう、實際また貴君方の作物に定價幾何郵税幾何、甚だしいのは勸工場の賣出と一般、特別割引の廣告まで掲載しながら、どこに賣文の徒でない人がありますか、而之も最初から版を重ねて置いて、僅か五百か千部づつで第何版といふ白痴威喝の今日、文學は金錢の交換物でないが聞て呆れる、いふ勿れ出版書肆の商略上と、その商略上に引放されて飯の喰へる人が居りますか、憐むべし現實の状態は新聞雑誌への切賣に狂奔し本屋の番頭小僧に取入つて一文でも値の宜い方へ原稿を荷ぎ込むといふ先生が多い、文士の人格も品位もあつたもんでない、時に賣れざ

るを以て高しとするは逆も貴君方の領分ぢやアありません。それは後世に知己を待つ一代傑出の文豪がいふこつた、その貴君方が此社會を俗だの厭だのとは、けしからん借上の沙汰だ、この社會が貴君方を今日まで殺しもせず潰しもせず其まゝ無事に生して置いてくれる慈善的の雅量に感謝しなさい、感謝して自分は自分だけの分相應に爾を作るべしだ、その爾の中で勝手次第に、どんな夢を見ても寢言を饒舌つても差支ないが、生意氣に自己より外面へ向けて食出しちやツ不可、社會全體の分量程度、いかなる邊で轉がッてるが我身一個の置場處さへ分らないくせに、この人生を美化させるとか、光輝あらしめるとか、ははよよももし他よりの比較を去て自己が執る業を神聖とすれば、ランプやホヤの破片を買ッて歩く賤しい職業にも其道に於ける神聖だ、もし高尚といへば坂の下の北風に吹かれて水鼻を垂れる立ん坊も、高尚の理窟はある、もし正直の點からいへば盜賊し、監獄へ這入

る奴が最も正直だ、兎角この文士とか小説家とかいふ先生達は糸目の切れた奴風で、ただ闇雲と自己ばかり有頂天に高く飛で仕舞ッて、少しも地上の人間界を知らないから困る、加之も糸が切れて其日の風次第に方角も定めず、ふわくと揚ッた先生だから、その風が無くなる大變だ、頗る危険だ、瀧壺へ落ちるか海の中へ墜ちるか汽車軌道へ落ちるか、到底、ろくな場所へ納まらない、現に貴君の如きも名こそ吉田大嶺で、いかにも重々しく動かないやうだが、よほど軽々しう飛揚ッた調子がありますぜ、飛揚るも宜いが、なるべく地上の人間界に縁の糸の切れないやう注意なさい、はよよよ」

吉田大嶺、無言のまゝ啞のごとく椅子を離れて立てば、大島院長これを額越しに見上げての目禮、

「さやうなら、お隙があれば御遠慮なく、また入らッしやい」

殆ど宮庭式の畫面を理想とせる日本在來の美人は、何の不幸ぞ生きた身體を箱入人形に等しく深窓に閉籠められ、加之も世間體の壓迫と家族制度の人爲的を加へ過ぎし結果、内外より責付けらるゝ苦しまぎれに哀れや生理上の發達を損ねて、いつしか不自然の病的美人となりしもの多かりしが、近來はまた一足飛に不自然の反動力、あまり開ツ放しの我まよ三昧に育ちて、よろしくと野生の蔓に等しく手當り次第に伸び過ぎし結果、到る處に擲付て今更始末に終ぬ事となりぬ、

箱詰の病的美人こと一變して野放しの放縱的美人となり、その野生中より更に生理上の發達し過ぎたるもの、これを衛生的美人といふ、

いはゆる衛生的美人とは、日本固有の纖弱き不自然的に對する語にして、その美人の稱は元

來の美なるがためにあらず、たゞ女を嬉しからせる當座の愛嬌お世辭に過ぎず、實は遺憾なく膨れ上りて骨格逞しき大女、ぶツても叩いても急に死さうもない女の事なり、

この遺憾なき生理上の發達美人、即ち衛生的美人の標本ともいふべき女、年輩二十一二の勢ひ猛なる眞ッ盛り、固より當世ハイカラの大廂、さらぬも短かき猪首を鳥の毛に埋めて、わざと澄し込む其顔を見れば、鼻の低きにあらず目の細きにあらず額の突出たるにあらず、あくまで彈力を帯びし皮肉の無遠慮に張出したるがためのみ、氣笛に等しく四邊かまはぬ黄色の聲を放ちて、その名を星野露子とは、案外に優し過ぎたり、

これに對ひしは副院長の塚原要藏、じろりと一目みるや否、聊か恐れを抱いて反身になりしが、今更ら遁け出されもせず其まよ度胸を据えて椅子に凭りぬ、

「はよア星野、露子さん、いかにも優美な御名前ですな、星と露、その對照が既に一の美文

を成して居ますね、お年齢ほ、なるほど、二十一、まだ只今いづれかの學校ですか、それとも業を卒て専ら家庭に居られますか、第一この煩悶病院へ來られた主意を簡単に承り

ましやう」

皮一重を張切るばかりに遺憾なく生理上の發達を遂げて、いかなる血氣の荒男と組でも容易に負けぬ體格、いはゆる衛生的美人の標本に出來たる星野露子、心の珠玉は兎も角、まん丸の兩手に輝くダイヤモンドの指環、これすら實は眞偽いまだ定らぬ怪しげの光りを、わざとテーブルの上に出しなが、搔亂せる如き廂髪の下より豆粒のやうなる目元、さら

に一點の愛嬌もなければ、本人の氣では世間あらゆる男に對して一種の魔力を備へし量見なり、

「失禮ながら貴君は、院長さんで居らっしゃいますか」

切口上に念を押されて、塚原副院長いよく恐れ入りぬ、
「いや、院長の大島ではありませんが順番の都合上、御不満でも致方がない副院長の塚原といふ者です、是非、院長とあれば二時間ばかり、お待ち下さいしかし一應、いづれにせよ御來院の主意を承はりましたやう」

「あら、どちらでも結構ですが、ちよいと只お伺ひ申したんですよ」

「それは御丁寧な事です、はよよと時に貴女は、まだ御獨身ですか」

「まだ、まだは酷い事、さう嫁期を過ぎた女に見えまじやうか」

「はよよと決して其、さういふ意味ではありません、ぢやアお嬢様ですね、つまり婦人の生涯に再び顧みて得べからざる大切の時期で最も清く尊き美の極點、いはゆる純潔の處女で居らっしゃるんですな」

「大變な御解釋の入ります事、どうお答へ致しませう、ほよよ」と

「なアに別段、解釋を入れた理由ではありませんがね、御承知の通り時計でも指環でも薄ッぺらな金著せの天ぶら物が流行る世の中だ、兎角この頃の、お嬢様方には油断がならない、案外の大膽不敵、うっかりすると危険千萬、とんだ處女のイカサマに出喰さうですから、玉石混合の恐れを避けて、わざと殊更ら貴女に敬意を表した所以ですよ、はよよよ」と

「ますく、むづかしくなります事ねエ、ほよよよ」と

「いや、これぐらゐの慎重の態度で窺つても、どうかすると、やられますよ、はよよよ、さて貴女を清浄無垢の純潔なるお嬢様として、御両親は」

「父は御座いません、たゞ母と今年十三歳になる弟のみで」

「なるほど、お家の御職業は」

「父は相當の官吏でしたが、死後、別に何も致しません、幸ひ父が多少の財産を遺してくれましたから、まづ、夫で」

「はよア、お父様は既に歿せられて、おッ母さんと十三の弟さん、なかく貴女は世間普通の嬢様方より責任の重い身ですな、加之も二十一といへば猶更の事ですな、その貴女がこの煩悶病院へどういふ、理由の下に來られました」

塚原副院長、つらく星野露子を打守りて、俄かに小首を傾け始めぬ、

「古い諺ですが、物まづ腐りて虫を生ずるの理で、生理上の發達に根本を置かれてある人間は猶更の事、その身體に何等かの異状があつて後、自然に氣の鬱いだ顔の色、悪い虚弱な貧血性の人に頭腦の病的を帯びるものですが、どこに一點の申分もない血色といひ皮肉といひ實に遺憾なく發達して居らるゝ貴女のやうな體格の立派な御婦人に、苟くも煩悶と

か悲観とかいふ陰鬱性の宿るべき筈がない、その貴女が今日、わざわざ當院へ來られたのは全體、いかなる理由ですか、なるべく枝葉に渡らず簡單に承はりましたやう、父の遺産があるといはる以上、まさか差迫つた生活難ぢやありませんまい、まだ良人を持たない身に妻としての涙あるべき筈がない、おッ母さんと弟さんと母子三人、いはゆる水入らずの單純な家庭に常識の缺けない以上、これとて圓滿を損する程の悲惨はありますまい、どうしても、いづれの點より見ても、まづ貴女と煩悶病院は直接の縁が遠いやうですな」
 但し戀ですかといふべきところを、わざと口に出さず奥齒に嚙殺して問へば、星野露子、何とやら不足らしく恨めしげに顔色を現はしながら、流石に差俯いて小さき聲、
 「生活難も、家庭にも別段、煩悶は致しませんか、まだ良人を持たない身に妻としての涙あるべき筈がないといふ其涙を妾、まだ定めぬ良人の爲に」

「はてね、不幸にして、もし配遇を誤れば生涯の悲惨、その時に始めて湧出づべき涙を、まだ人の妻にもならない獨身の貴女として、何故その涙が今から出るんです、世間普通の人情、理想の良人を描く處女の常としては寧ろ楽しく嬉しく、日夜たゞ前途の希望に満されて居る筈ですが」

「その希望が、叶はないからです」

「はよア、わかりました、その希望が叶はないための涙といへば、もはや理想でなく空想でなく既に現在、その希望とする未來の良人が定まって居るんですね、定まって居ながら、貴女の定めた通りにならないといふ煩悶でしやう、つまり、涙の取越だ、露骨にいへば、貴女は本氣の沙汰でも先方の奴が、いや先方の人が案外、うはの空で、さほどにも思つてくれないといふ御立腹の次第ぢやアありませんか、頗る卑近な言葉ですが世俗にいふ鮑の

貝の片思ひ、ではありませんか、過不及なく相愛して成就すべき一の戀なるものに平均等分の數を缺た理由でしやう、ことし十三の弟さんは兎も角、それに付て萬事おツ母さんは御存じですか、但し貴女ばかりで、いはゆる事後承諾になさる、覺悟ですか、その人の身分職業年齢、どういふ方です、第一また貴女は、たゞ意中の一人、希望の目的物、未來の良人と定めたのみですか、先方からも何等か他日の條件となるべき確い約束があつたんですか、それとも相方が互ひの間で既に希望以上、約束以上の事實が實行された交情ですか、息も次がせず疊みかけて、じろりと眞正面より星野露子の顔を打守りぬ、戀を神聖とすれば、人間美德の極、いづれの方面いかなる人に對ふても大に誇るべき筈なれど世間普通の人情、その神聖を眞正面より剝出に問はれて平氣に答ふるものなく、わけて處女に對する戀を發くは秘密の底を打割るに等しく、あまり無遠慮に過ぎたる殘酷の所爲なれ

ど、この無遠慮と殘酷を全身に浴せかけても大丈夫と心得たる塚原副院長、實際また浴せられても身も驚かず顔を赤らめぬ星野露子、殆ど負す劣らぬ勢ひ兩々相對して案外の露骨談となりぬ、

「星野さん、露子さん、實際まだ貴女は清く汚れざる神聖の處女ですか」

「ほよよと妾、さう聞かれては、困ります、ほよよと」

「いや、困る困らないは俵置て、まづ事實問題から始めます、つまり今いふ未來の良人なるものに對して貴女のため三段に分ちましよう、第一は只これ意中の人ですか、第二は相方お互ひに約束でも出来てるんですか、第三は、もはや既に肉體上の關係を遂けて居られるんですか、いづれにせよ當院は貴女に不利益を醸すところでないから、ありのまよお聞き申したい」

「實は、妾、その三段とも」

「は、ア、三段とも嬉しく楽しく順序よく遂行せられたンですね、さうでしやう、さうあるべき筈です、たゞ空しく意中の人に止めて未だ先方に通ぜざる戀のため煩悶するやうな貴方でないと思ましたよ、は、は、は、貴方に限らず當時は皆その流です、手應のない片思ひのため夢うつと一室に閉籠つて半病人になるのは昔日の處女だ、今日の處女が男に對する戀は賣買の取引と一般、何等か既に確かな事實上の關係がなければ戀の部に入れないやうです、すからねえ、は、は、は、處で貴女の戀人は目下、貴女に對して、どういふ態度です」

「内々は母も承知して居りますし、また先方の兩親も、うすく知らない筈なく、いはど公然の祕密ですが、近ごろ本人の意志に疑はしい點が、無論まだ在學中ですが」

「在學中、どこです學校は」

「ある私立大學の卒業前、一年で」

「疑はしい點といふ、その點は全體、いかなる點です、貴女の外に關係した女でも出來たのですか」

「どうも、さういふ點が、頻りに見えますから、それがため」

「なるほど、それがための、煩悶ですな、その女は何者です」

「妾と同じ女學校を同期に出た、妾の最も親しい、朋友なんです、つまり妾は一時の戀に弄ばれて拭ふべからざる生涯の侮辱を、あれほど堅く神に誓ふた未來の良人と最も親しい朋友のためにうけました」

「それに付て事實の證據を、貴女が認めたんですか」

「別段、これといふ證據を押へたでもありませんが、また決して想像のみでもありません、

双方いづれも妾といふものを除いて伴ふべき筈のない彼等二人が現在、人しれず相携へて日比谷公園を散歩、散歩以外、散歩以上、たまく途中で出逢つたとは思へない愛の程度で、何か私語て居たところを妾、たしかに認めました」

「はよよ、それだけですか」

「いへ、それ以来、その二人が妾に對して、何だが妙に、今までにない冷淡な態度を示されるやうな氣がして、するのみでなく事實、して居ります、わざと殊更に示して居ります」
「俗にいふ油揚げを意に攫はれた次第で、そりやアお氣の毒だ、同情に堪ませんが、只それだけでは御相談に乗りかねる、なほ委しく、お聞き申したい事がありますよ」

塚原副院長、おもはず出でし鼻頭の冷笑を其まよ押隠して、わざと眞面目に聲を潜めながら星野露子に打對ひぬ、

「なるほど、貴女と既に忘るべからざる肉體上の關係を結んで、もはや動かすべからざる神に誓ふた未來の良人、否その未來も待遠しい理由でなく實は公然の祕密で、いつ何時でも貴女の専有になるべき筈の良人が、急に貴女の愛を振捨て、他を顧みるとは、なるほど、けしからん事ですな、加之も其女が金銭上で出来た藝妓の類でもある事か、貴女と同じ女學校で最も親しい朋友といふに至っては言語道斷、あまり侮辱に念が入り過ぎて頗る残酷な所爲だ、いかにも同情を寄せますが、ふしぎに近來の貴方女が演じ出す戀なるものは、必ず當時流行の小説的に觸れてるやうですな、その日比谷公園に貴女の愛を奪ふた男が相携へて散歩以上に喃々たるところを、現在の貴女が認めて鬱蒼たる樹の蔭か芝の上で打倒れながら當世式に煩悶する工合、背景といひ表情といひ、どうしても新俳優に持つて來いの筋書だ、これも自然に湧て出た時代の一産物か知らないが、今日の小説と今日の新

演劇と今日の貴女方に於ける戀とは到底、離るべからざる深い約束の因縁があるやうですな、この脚本で見ると、甚だ酸鼻に堪ませんが、貴女は悲劇中の主人公だ、無論座長とか何とかいふ一等俳優の持役だが御用心なさい、わるくすると大變な最後になる、どツか名高い海邊か山の中の月夜に只一人、さんざハイカラ式の愚痴を滾した後、その身を投じなければ濟まないやうな事になります、もし幸にして貴女が最後の間一髪、相手の男女が都合よく其場へ駆出して来てうまく懺悔でもしてくれれば宜いが、こりやア當にならない、悲劇に始まつた主人公は其悲劇を強めるため、やはり悲劇に終らせますよ、以上の筋書ですから貴女は逆も助からない、助かりたいと思へば今のうちだ、入らざる餘計な表情を仕續けて、うかく、月夜に海邊や山間へ近寄らないに限りますよ、なアに愛を奪はれたといふものゝ實は失禮ながら、澤山まだ貴女に取て置の愛があるでしやう、さう惜しいほど

の愛ちやアありますまい、元來が博愛主義で只その一分子を損したどけの事でしやう、御覽なさい、奪つた先方の男女だつて、風に散つた落葉の重つた如く一時の現象だ、それが生涯の目的でもなしさ、はよよつたり貴女方の戀なるものは、戀その物の出來工合があまり單純で容易で、あまり手軽く成立つ割合に、あまり自分勝手の理窟が難かしく持つて廻つてつまり自縄自縛に動けない状態がありますよ、いはど肝心の根が淺くつて無用の枝葉が茂り過ぎるから、わづかな風でも、ゆらくする理由だ、はよよも少し根元の緊つた幹の太い事で来て下さい、今お聞き申したやうな事ちやア煩悶病院の時間を割て此上、甚だ露骨だが貴女に接する餘裕がありません」

社會は平均によりて保たれ、人間は常識によりて保たれ、その平均と常識の外に飛放れたる

英雄と豪傑は、いつしか時世の敬遠策を施されて無用の寶物と一般、あたり觸りのないところへ祭り込まれし今日、まして蓬髮鮮衣に慷慨淋漓たる壯士の面影は、あはれ白晝の化物に等しく、うかくすれば生捕られて淺草の見せ物にせらるゝほどの世の中となりぬ、
されば壯士も世に連れて慷慨悲歌を賣り歩かず、易水よりも香水の匂ひに近づいて、ステツキを振廻すよりも智慧を振廻しいつの間にもやら紳士といふものに早變りせし今日、猶いまだ風は蕭々たる秋の肌寒に取残されの壯士あり、加之も破帽子を脱けば頭上に霜を頂いて空しく昔日の夢を語りながら、今や將に五十の坂を上らむとする後姿、すぎし春や春その花に捨てられて冬枯の路傍に食を乞ふ名妓の落魄よりも哀れなり、この老壯士まづ煩悶病院の受付に破鐘の如き聲を發し、診察所に肩を怒らし目を剥出して腕を抱しながら、敵を待つが如くに差控へぬ、

大島院長、靜かに入來りて見れば、容貌といひ風采といひ態度といひ、いかにも今日の社會に用のない顔色、縁も由緒もない初對面なれど、何とやら昔日の形見に残りし骨董物に接するが如く、寧ろ一種の好奇心と敬意を以て懇懃に迎へぬ、

「初めて御面會いたします、不肖ながら院長の大島といふものです、よく御來臨くださいました、」

「はよア、君が院長か、いや、内容は兎も角、面白いな、煩悶病院とは面白い、實に奇だ、今日のやうに世の中の奴等が弱くなつて、腦味噌の腐つた社會に煩悶病院は適切だ、痛快だ、どうです、定めて、いろんな患者どもが押掛けて來るでしやうな、はよよ」

「なかく來ますね、殆ど忙殺されるほどの景況です」

「だらう、さうあるべき筈だ、身體か頭腦か、有形無形いづれの點か病的にあらざる奴のな

い世の中で、廣き意味に於ては社會が既に一の大なる病院だ、藥臭くて堪らない、どうしても僕の如き頑健な人間は容られんよ、なア、院長、はよよ世を舉げて品性の墮落、意思の薄弱、富貴の奴隸、詐欺の競争、虚榮と虚飾の病に唸ッるて奴ばかりだ、天下また一人の病尊を離れて語る奴のなに至ッては、實に歎かはいね、この末この世の中と人間がどうなるだらう、今こゝに傑出不群の大手術家が現はれて驚天動地の荒療治でもせんければ無効だ、我輩の如き實は其、助手を以て任じたるものだ、はよよよ」

一語一句に天井を仰いでの大笑ひ、室外に響き渡りぬ、

この老壯士、ますく肩を怒らし腕を組み胸を突出しながら、殆ど二十貫に近き大兵肥滿、ぎゆうくと、椅子を鳴して氣焔を吐きぬ、

「なア院長、これが風潮といふか時勢といふか將また自然の約束といふか知らないが、まづ

僕の見るところ、社會は其時代に應じて出來た一の大活物で、人間は其大活物に産出された一の分子とすれば、凡そ今日の世の中ほど今日の人間に相應した社會はあるまい、既に世の中が病的だから、その世の中に湧た奴は悉く病的だ、あまり母胎が弱過ぎるから、どうしても弱虫の餓鬼どもが多い、あまり親に似た子ばかりで困るよ、少しは鳶鷹を産む格で、瓜の蔓に茄子も出來てくれんと面白くない、あまり平凡過ぎるよ、あまり奇が無過ぎる、餅屋の伴が餅屋で飴屋の親が飴屋の子を尻り出すのちやア、無効だ、九尺二間の裏店より天下の志士を出し百姓の腹から一代の國士が飛出してこそ、こゝに始めて社會の活氣を呈し一家の名聲を擧ぐる理由だ、なぜ院長、かう世の中が病的になつたらうかな

ア

大島院長、閉ぢし眼を靜かに開いて、おもはず滿面に微笑を浮べぬ、

「なるほど、いかにも今日の社會は一の病的です、その病的の母胎から産出された今日の人間だから、どうせ健全なものはありませんよ、ところで其親を病的とすれば、その子よりも第一まづ親の療治が肝要だ、つまり社會の改良が必要ですね」

「や、そこだ、なか／＼院長、うまい事をいふわい、はよ／＼實に然りだ、大に我意を得てるよ、はよ／＼」

「しかし母胎の療治、即ち時世の救済策、この社會の改良といふ事は、口でこそ容易ですが、實際の上に於ては逆も一朝一夕の業でない、よほどの大手腕を持つた大名醫でなくては叶ひませんから、遺憾ながら技術の足らない我々は當分まア、姑息にせよ、爲さざるに勝るの意味上、せめて生れた子どもだけの療治でもと心得て、こゝに煩悶病院を建てた次第ですが、幸ひ貴君の如き健全者は病める母胎の子でなく、いはゞ達者な先妻の腹から出たと

いふ理由ですね、はよ／＼」

「や、院長、ます／＼うまいぞ、いかにも其通りだ、無論、僕は病的を帯びた今日の産物でない今日の如き不完全な母の胎内から産み出された子でない、ないから院長、勢ひ今日の親を有難く思はないだらう、そこで今日の社會奴が猶更ら僕を憎んで、繼子扱ひに仕をるわい、なアに院長、いくら繼子扱ひに仕をっても、この繼子が、たゞ窘められて、べそべそ泣くやうな弱虫に生れちやア居らんがね、おり／＼癢に觸つて堪らないよ、まさか親殺しも出来ないからなア」

いかに世の中の壓迫を加へられて人しれぬ涙を注ぎしか、流石の老壯士、おもはず本音を吐いて情け返りぬ、

世に空腹の瘦我慢といふ事あれど、これは二十貫目に近い老壯士の強情我慢、四邊かまはぬ

大聲を發して、猛牛の唸るが如き氣焰を吐散しぬ、

「院長、そもく今日の社會は十中の八九、幫間と盜賊と淫亂で持った世の中だ、才子といふ奴の裏面は叩頭百拜に妙を得た、追従輕薄の徒輩で、紳士といふ奴の半面は巧みに法網を潜った詐欺漢で、社交の半以上は酒と女に狂ふ色飯鬼の寄合だ、たとひ君子ならずとも心に一點の耻を知るものが院長、どうして彼等の同人間へ這入れる、汚らはしくて傍へも寄れんぢやアないか、それを彼奴等、糞蠅は糞を珠玉とし豚は自己の醜を知らざる格で、正義正道の我輩なんかを寧ろ時勢後れの馬鹿扱ひに仕やアがるから承知が出来ない、承知が出来ないといふもの儲また彼奴等せめて多少の手應でもあればだがあまり劣等の弱虫で、あまり卑しい小人原で、苟くも志士を以て任する者の敵とするに足らないから困るよ院長、どうすれば我輩、この癩癩玉が治まるだらう」

「いや、さう癩癩に觸らない方が宜しいね、いくら此方が癩に觸つても知覺精神の麻痺した彼等には到底、何の感じも通じもありませんよ、つまり彼等は彼等、貴君は貴君、その間に一の大なる隔絶を置いて、關せず焉の態度に限りませよ」

「ところが院長、關せず焉では置けない事がある」

「なぜ、どういふ理由です」

「實は院長、この兩三年以來、大に我輩の決心した事があるから」

「はよア、いかなる決心をなさいました第一その決心が彼等に對して、どれほど密接の關係を持つて居ります」

「院長、もはや我輩も今年こゝに四十六だ、加之も家なく金なく妻子なく、宿昔青雲の志も達せず前途希望の光も認めず、實は放浪の生涯にも飽た生命の無用を幸ひ、この一命を

賭して今日この病的の社會療治、何等か彼等の興奮劑に與てやらうと思つてるんだ」

「なるほど、いかにも立派な御決心ですな、いはゆる身を以て國に呈するもんだ、貴君の如き志士が百人に一人なくとも十人に一人もあれば實に心丈夫ですよ、ところで、その興奮劑を、どういふ工合にいかなる場合に用ひられる覺悟です」

「さア、その工合と場合に困つてるんだ同じ事なら最も效能の多いところへ用ひたいよ、院長どことが宜からう」

「お待ちなさい、折角の御決心だ、國家の名藥だ、うかくつまらない場所に用ひては勿體ない、不肖ながら一考いたしましやう」

「考へて貰ひたい、是非、考へて貰はう、こいつア面白くなつて來たぞ」

大島院長、幾度か首肯て後、さも氣の毒けに老壯士の面を打守りながら、靜かに口を開きぬ、

「なるほど、いかにも貴君の性格としては、今日この滔々たる浮華淫靡の俗社會を見て居れ

ますまい、意氣揚々として肥馬輕車を走らす今日の紳士なるものが、癢に觸つて堪りませ

まいなア、貴君の目には殆ど惡魔の跳梁するが如くに見えましやうなア」

「堪らん、實に堪らんよ院長、殆ど惡魔でない、正に是れ惡魔だ、もはや見て居れない程度を超て、寧ろ見て居るのが苦しいくらゐだ」

「見て居れない時分は、まだ堪忍も出来るが、もはや既に見て居るのが苦しくなつたから、寧ろ一死の快に如かずといふ理由でしやうね」

「そこだ、そこだよ院長、どうせ面白くない世に生きて苦しむよりやア、寧ろ痾癢玉の破裂と共にダイナマイトの勢を以て彼奴等を粉碎して遣たいんだ」

「つまり入らぬ生命の捨どころを撰ぶ理由ですな、失禮ながら情死の相手になる女はなし、

さし當ツて今、どこにも戦争はなし、よしあつたにしても身は軍職にあらざる以上、出られる筈はなし、出る年齢でもなし、無論、苟くも國士を以て任ずるものが借金のために首も縛れず、第一また貸人もなからうし、豈夫味噌醬油の生活難で腹も切れず、そこで幸ひ今日の腐敗せる墮落社會へ一服の興奮劑として、清涼劑として與へる理由ですね」

「や、院長、聊か言葉に面白からん處もあるが、結局、まアそこだ、どうすれば今日この社會の興奮劑になるだらう、どうすれば實際、彼奴等の清涼劑になるだらう」

「さやう、なか／＼難しい問題ですね、たとひ虫一疋でも無意味に徒死するもんでない、まして人間一個の生命、粗末に捨てられませんかよ況ンや貴君の如き潔白の志士を此、この汚らはしい世の中に投ずることだ、實は勿體ない、よほど效能のある適切な呼吸を視ツていよいよこゝ一番といふ、うまい調子の急所へ持込まないと鼠を打つに珠玉を抛けるの遺憾が

ある、牛刀を以て鶏を割くの段でないから最も慎重の態度を要しませ、慌てよは不可、急いでは損だ、どうです、もう二三年、じツと待つてませんか、こゝ二三年の後には今日の社會ますます墮落して其極に達しますから、夫に對する貴君の投薬も亦ますます適切に效能の多い筈だ、いづれの方面より考へても今すぐにはあまり惜しいですよ、是非とも二三年間、お待ちなさい」

「院長、その二三年間が我輩に取て、頗る苦しい理由があるよ、實は院長、けふ明日にも、やつて見たいんだ、なアにどうせ捨てる生命だからなア、さう悠々と構へては居れンよ」
「けふ明日、はよア、さう至急に迫つて居るんですか、そりやア、大變だ、よろしい、ぢやア現在、今すぐ目下の捨場所に就て一考いたしましたしやう」

一死以て國に報ずる老壯士の慷慨悲憤、今日この腐敗せる墮落社會に一眼の清涼劑を與へて

くれんといへど、實は一身以て家に安んずる事も出来ず、どうも生きて居て面白からぬ世の中に五十の坂も近く、此まよ路頭に飢死するよりは何か目覺しい死花を咲かして見たいといふ心體、つまり鬱勃たる癩癩玉の遺場もなく身の歸着點もない自棄くそなり、

「院長、かう世の中が濁つて、泥臭くなつて來ちやア到底、我輩の如く清廉潔白の人間は一日も心持よく住んで居られんよ、去るに如かず逝くに如かずだ、しかし多年こよに天下の志士を以て任ずるものが、只このまよ去つても面白くないから、その去り際に一番、何か置土産を残してやらうといふ精神だ、虎は死すとも皮は尊ばるだ、なア院長さうぢやアないか」

大島院長、ますく一種の悲鳴を聞くが如く、あはれ氣に其顔を打守りぬ、

「なるほど、虎は死して皮を残しますが、さて當時の人間、どんな豪傑でも死だ後は借金ばかり残り世の中です、だが貴君は別として儲その置土産は、全體いかなる土産です」
「さア、その置土産だ、どういふ工合に、どんな物を残してやれば世の中のためになるだらうか、ことが院長への相談だ、今いふ通り二三年は儲置き、けふ明日にも、やつて見たいんだ、もはや一日も待てないよ院長」

「もし二三年さへ待たると覺悟なら、實のところ幸ひ恰度、その二三年間を確實に悠々と何の心配もなく安樂に愉快に寝ながら待つて居れる工夫はあるんですが、けふ明日に迫つて一日も待たれない、今すぐといふのには困りましたね、しかし折角の御相談だ、よろしい考へましやう、不肖ながら、この大島が考へ出せば、きつと二三分の間に貴君の生命を捨てる場處が出来ますよ、最も適切に遺憾なく實行し得らるゝ死場所を眼前に示しますが、いざとなれば取返しの出來ない事ですよ、失禮ながら念を押して置きますぞ、いよくそ

の決心ですか」

「いや院長、ちよいと、ちよいと待った、どうせ一死の覺悟だ、さう慌てよ急ぐにも及ばん、今、院長の言葉に、もし待てば二三年間、何の心配もなく愉快に安樂に寐ながら待つて居れる工夫があると、いはれたな」

「さやう、あります」

「そりやア院長、どういふ工夫だね、苟くも天下の志士だ、一旦かうと定めた決心を翻へす事も出来んが、参考の爲め聞いて置かう」

「一死の決心を翻へさない天下の志士に、今更ら生残つて二三年の安樂を貪るやうな、さういふ参考は入りませんぢやないか」

「入らんがね院長、はよよと案外、院長は頑固過ぎるよ夫ぢやア院長、あまり正直過ぎるよ

少しは察して貰ひたい、我輩だつて強ち、さう死ばかりが唯一の目的でないさ、はよよと唯この我輩が一死を以て今日の墮落社會を救ひ得る道さへあれば、救つてやりたいといふ理由だからなア」

「しかし生きて居れば今日の世の中と今日の人間が癪に觸つて堪らない、寧ろ苦しいから一死の快を以て社會のために何等か残してやりたいといふんでしやう、すれば貴君その一死は二三年の安樂と愉快に替られない筈ですが」

「さ、そごだて院長、今日の世の中と人間は癪に障るが、依然たる天地の自然は萬古不易、やはり花も咲き鳥も歌つて四季の風物に接する我輩だ、さのみ癪にも觸らんよ」

「はよよと何だか妙に論點が違つて來たやうですな」

「違つても違はなくても、そりやア後で分るよ、まづ院長この二三年間の安樂法を示して

「貰ひたい、苟も天下の志士が生死に關する事ぢやアないか」

「天下志士だから困るンですよ、もし天下の志士でなく、これが食ふ道のないとかいふ凡夫の相談なら、すぐ今この安樂法を實際お勧め申すンですがね、既に死を決した天下の志士には、餘り眼前の幸福に走り過ぎて寧ろ無禮だ」

「なアに院長、さういふ遠慮には及ばンよ、いくら眼前の幸福に走り過ぎて宜い、志士また時に圓轉滑脱の洒落ありさ、我輩に暫く忍んで、この凡夫になるから、ちよいと試みに二三年の安樂法を教へてくれ玉へ」

「事實に行へる安樂法です、ちよいと試みでは不可い」

「ちやア誠心誠意、眞實に聞かう」

流石の老壯士、いつしか本音を吹出して飢えたる猿の餌を乞ふが如し、

束髪でなく廂髪でなく、うるさげに鬢を搔き上げて、近來あまり見當らぬ無雜作の櫛卷、さりとて一本の毛も亂さぬ艶々しさは、どこやらに人しれぬ手が届いて、いづれ尋常の女でない證據、くつきりと垢ぬけて目鼻立の冴渡りし工合といひ、半襟のかよりしは不斷着といふ申譯なれど小荒き大島の二枚重ね、わざとならず身に添ひし風情といひ、加之も古風に惜氣なく可憐ら眉毛を剃落して、まだ三十前後の水際立ちし美人、見るものよ目には聊か凄味あり當世ハイカラの希望には多少の缺點もあれど、所謂意氣に仇ッほい日本式の男殺しには無上の銘刀、どうしても曰く因縁の有さうな女なり、

ふしぎに女の煩悶者には塚原副院長の順番、これも免れぬ一種の女難と心得て、おもはず苦笑しながら、じつと見れば見るほど身の素性に仔細ありけの女振、罪の淺いとこで待合の女

將か料理屋の名物主女か、もし深ければ浮世の堀ぬき井戸、世間普通の尺度では逆も底の知れぬ曲物なり、

「さア遠慮なく其椅子へおかけなさい、別段、むづかしい挨拶は入りませんから、御身分と年齢と、お名前と、けふ當院へ來られた要點だけを簡單に承はらう」

「お忙がしい中へ、とんだ、お邪魔を致しまして」

「なアに營利的ではないが、これが職業ですよ、はよよよ」

「恐れ入ります」

「時に、今いふ御身分は」

「名は貧乏のくせに、富と申しまして、年齢は三十の上を、いつの間にか貴女うかくと二歳も」

「お名前と年齢はわかりましたが、第一御身分ですよ、失禮ながら何をなさるね」

「身分、どうせ貴君、御覽の通り身分のあるやうな女では御座いませんが、まア兎も角も、

どうか斯うか、その日だけを困らずに暮して居るものと、思召して戴いて」

「いや、それぢやア不可、名前よりも年齢よりも寧ろ其人の身分、つまり職業と境遇を聞くのが第一の要點です、名は嘘でも宜しい、差支がない、また年齢は秘しても大定、わかりますが身分は此方から極められませんよ」

「はよよと眞實で御座いますね、しかし申上げる前、ちよいと御覽あそばしたところで、この妾が、まづ何に見へまじやう、實は二三度、先方から當てと戴いた後でなくては、あまり耻かしくッて、づうくしく自分の口から申上げ憎い女で御座いますよ、外の方と違ッて毎日、いろんな人を御覽になる御鑑定ですもの、一つ二つ仰しやればきツと鬨星に中り

ませう」

なるほど此女、いよく尋常の女でないと見て取る塚原副院長、おもはず腕を組で眼を光らしぬ、

年齢と名は口に出せど、身分を容易に明さぬ女、加之も水際立ちし片頬に笑渦を浮べながらこの妾は何に見へまじやうかと逆寄に問返されし塚原副院長、此女いよく尋常の女でなしと見て取りぬ、

「今もいふ通り當院は營利的でないから、いちく来る人に向ふて愛嬌お世辭は勿論、無用の時間を費す事は出来ません、此方の間に應じて答へないものは斷然、謝絶するのみですが、實は我々のため聊か研究の材料になりさうな貴女だ寧ろ一の興味を以て迎へまじやう、ところで貴女の身分だ、はてね、ふむん」

「ほよよとんだ厄介物が舞込みまして、さぞ御迷惑で居らっしゃいますやうが、まだ妾、人様に向つて自分の口から自分の身を申上げた事は御座いません、先方から圖星を指されれば致方ありませんが、第一また大びらに申上げるやうな女でないですから、世間體、わざと御遠慮を致して」

「ますく、わからない、どうせ堅氣でない事だけは、中りまじやうね」

「勿論で御座いますよ、いくら化たつて、妾どもが堅氣に見へては、お素人衆に濟まない理由ですから」

「そこで、まづ白晝よりも夜の方に重きを置く、家業でしやう」

「ほよよと桌では御座いませんが、やはり人様の寢靜まる夜半に目が開て居ります」

「はよよと夜の家業といへば通常まづ待合、料理屋の類ですが、それぢやア、あまり貴女を

單純に見過ぎて居まじやうな」

「もし待合とか料理屋とか藝妓家業なら、誰だつて一目すぐに見分けますよ、公園の銘酒屋だの、矢場だの、また鑑札の下らない淫賣的なかの御鑑定はいくら、何でも真ッ平で御坐います、ほよよよ」

「さア、いよく分らない、その他に於て人の寢静まるころ起きて居るとは、こいつ頗る難題だ、無論、定まる御亭主はありますまいな、公然、人の妻ではないでしやう、つまり貴女が萬事一切を引構て居らるゝ主人でしやうね」

「まア、その邊で御坐います」

「住所は、どこです」

「あら、いけませんよ、するい事、女名前で住で居る由を申上げては、そろく匂ひますも

の、只かう見へたまよの妾だけで、何と御覽なさいますか、こよが面白いんですよ」

「さて、困ツたな、元は兎も角も目下のところ、お妾」

「いよえ、たとひ世話して下さる方があつても、眞面目に神妙に日蔭を守つて居られる妾では御座いません、もし妾なら實は此方で男妾の二人や三人、持つて見やうかと思つて居りますよ」

眞綿の中より針を突出すが如き言葉に、塚原副院長、はツと思はず目を閉ぢぬ、流石の塚原副院長も、何とやら薄煙に鼻頭を撫でられし心地、いかにしても正體の分らぬ女なり、

「待合の女將でなし料理屋の主女でなし、藝者でなく遊藝の師匠でなく、下ツて矢場でなく銘酒屋でなく、もし妾になるなら此方で男妾の二三人も持ちたいといふに至つては、い

よく分らない、加之も女名前で世間の寢静まる頃に起きて居るとは、猶更ら以て見當が付かない」

「ほよよいくら御鑑定家でも、ちよいと御分明になりますまい、お分りにならないのが正當です、もし分れば、それこそ不思議なくらゐで、ほよよつまり化物ですもの」

「化物、化物とは」

「まことに濟まない、恐れ入った事ですが、ことし三十二になるまでの間、さんざ世の中を欺しぬいて来た化物で御坐います」

「ふむ、ちやア今、猶まだ化けて居る理由ですか」

「いゝえ只今では以前のやうに、さうも大膽に化けて居りません、實は昨年の夏ごろから、そろ／＼正體を現はしかけて居ります、しかしまだ三分ばかりは、どツかに化の皮が残ッ

て居るかも知れません、ほよよ」

「ます／＼分らない、いよく兜を脱で降參だ、全體どういふ、素性來歴を持つて居らるか、過去と現在の境遇をありのまゝ打明けて貰ひたい」

「どうせ打明けた上、御相談と申しては失禮ですが、何とか氣も静まつて安心の出来る道を願ひに參つた妾ですもの、萬事さらけ出して打明ける事は打明けますが、もし隠さず打明けた後に、こりやア驚いた、まさか、さういふ女とは思はなかつたでは妾、困りますよ、たゞ困るばかりでなく、お恨み申しますよ、たゞ恨むばかりでなく、きツと、それだけの事を致しますよ」

ます／＼物凄く出られて、圓轉滑脱の塚原副院長も、聊か堅くなりぬ、

「當院の設立以來、始めての患者だ、よろしい、寧ろ面白い、その覺悟で打明けなさい、此

方も亦その覺悟で聞きまじやう」

「實は妾、女盜賊ですよ」

「ゑッ、女盜賊」

「男の子分を百人以上も持つて來た女盜賊で御座います」

世間あらゆる人間に對して鑑定自慢の塚原副院長も、これは案外の女、なるほど正體の分らぬ筈なり、男の子分を百人以上も持つて來た女盜賊とは、

きくや否、おもはず呆れて暫し無言のまゝ其顔を打守れば、虫一疋も殺さぬほどの優しき面に片頬の笑渦、

「どう御覽あそばしても、おわかりになりますまい、おわかりにならないが當然です、もし

一目で直く分るやうぢやア、かうして今日まで貴君、逆も無事に居れる身では御座いませぬもの、ほよよとしかし世の中は思つたより妾等のため自由自在に間道のあるもんでねエ貴君、ほよよ」

「こりやア驚いた、實に驚いた、いくら怪疑の目を以て見ても、まさか、さうとは、眞實、それかね」

「善い事で本人のいふ事は世間普通、當にはなりません、悪い事で本人のいふ事に嘘のある筈は御座いませぬよ、第一また始めて伺つた自分の口から、戯談にも貴君、かういふ嘘が吐けますものか、眞實、女盜賊なんです」

「ふむ、だが赤本の小説にあるやうな昔の時世と違つて、殆ど遺憾なく警察力の行届いた今日だぜ、加之も飛耳長目の間斷ない東京の中央で、よく今まで無事に濟で來たもんだな」

「なアに貴君、いくら警察の御力が御届いたツて、親兄弟の仇敵を付覗ツて探し出す理由ぢやアなし、失禮ながら、つまり月給を戴いて御勤務になる方ですもの、勿論、中には随分損得に關はす給料や勤務の外で、いはど半道樂の一生懸命に來る恐ろしい、するどい方もありますかね、此方は猶更の一生懸命で、それに應じて遣られないだけの用意をすれば、まさか神様ぢやアなし、先方も同じ人間ですもの、さう貴君、いちく隅から隅まで手が届いて、落ちた豆を拾ひ上げるやうには行きませんよ、もし日本國中の人が皆、警部か巡查にでもなれば、それこそ叶ひませんか、なアに當分まアやはり、捕まる奴は捕まつて、どうしても捕まらない奴は捕まらないでしやう、ほよよと加之も妾は世間の人が油断して下さる女ですから、一割方、毛脛の生た男よりも仕事の仕よい邊がありますよ、ほよよ」

「や、ますく驚いた、ところで其、その女盜賊が何のため、當院へ來たんだね」

「かういふ大膽な、罪の深い、もし未來の世に地獄があれば、どうしても第一番に行かなければならない筈の妾が、まだ惡運の盡きない現在で、實は先生、近來、しみくゝと發心して仕舞ツたんですが、さて發心しただけの事で今更ら古風な寺へ這入ツて尼にもなれず、また悔ひ改めて天の父様とやらに謝罪るやうな耶穌は妾、大嫌ひです、いやよりも嫌ひよりも、つまり面倒なんです、ぐづくしてると捕まるかも知れませんからねエ、また妾どもの仲間で不思議ですよ、おかしく後悔して氣が弱くなると妙に無効ですから、おまけに今日まで百人前後も悪い因縁を繋いで來た子分の始末、これが先生何よりの難物です、もし妾が警察へでも名乗ツて出れば流石に御職分柄、それから、それと、すぐ筋道が分りますからねエ、いくら世の中に毒を流す悪い事にしろ、まさか多年の身に隨て來たものを一網に掛けたう御座いませんよ」

「なるほど、やはり一種の煩悶だな、いや、寧ろ世間に憚らない尋常の人間よりも苦しからう」

「眞實で御座います、元來よくない性質で、これまで物に恐れたり人に憚りたりした事は夢にも覺へませんが、近來、急に何だか臆病になつて來たといふ、これが先生、重い病人の秋風に骨を刺されると一般で、そろ／＼運の盡きる間際でしやう、もはや娑婆も長かかないと考へますよ、しかし今いふ通り寺へ遁込で尼になつたり警察へ飛込で年貢を納めるやうな、かういふ身體には當然の終焉で誰も出來る藝の外に何か、おもしろい目新しい神妙な身の捨場所は無いもんで御座いますしやうか、實は、それを伺ひに來つたんですよ」

「はよ／＼どうしても言葉の端に自然、お里が現はれるわい、面白い事と神妙な事とは實際に就て反對の結果だ、面白い事に神妙な意味は含まれない、また神妙な事に面白い意味は

含まれない、いづれか一に期するもんだよ」

「ぢやア一方に固めましやう、面白い事は由來、さんざ飽きるほど仕て來ましたから、神妙な方に願ひます、どうすれば先生、この罪の深い重い身體に神妙な終焉が取れましやう」

「さア、さうなれば、やはり人間として宗教に投ずる外はないが、その宗教が嫌といふ以上、まだ實は惡魔の支配を脱し得ないんだ、自分は後悔した思慮でも全くの後悔ぢやアあるまい、こゝは一番、思ひ切つて出直した方が宜からう」

「出直し、どう出直すんです、これでも出直す道があるんですか」

「ある、あるとも、大にあるよ」

「それを教へて下さい」

「何でもないこつた」

「おや、さう手軽に」

「手軽い、實に簡易な方法だ、今いふて今、すぐに出来るよ」

「どんな事です」

「死の一字だ」

「死、自殺ですか先生」

「いかにも、人に殺さるゝを待たず、みづから生命を絶つんだ、しかし、只、死で仕舞つては惜しい人間だ、明治の今日、加之も女で、その歳で、それほど凄腕を持って悪事を働いて来た歴史が惜しい、つまり反對の意味に於て實に惜しい、一は謝罪のため一は世の中のため、どうだね、盗賊の秘訣を社會へ打明けて仕舞つては、幸ひ百人も手下があるといへばいづれ種々さまざまの竊盜もあり強盜もあり、その他の悪事百般、あらゆる罪の構造工合

が違つてる筈だ、それを悉く文筆の達した奴に口授して、つまり萬卷の道德書に對する一冊の罪惡書を世の中へ遺すんだ、これこそ人間相應に遺憾なく神妙な終焉を告げられるだらうよ」

「なるほど、ねエ」

「わかッたか」

「わかりました、よく分りました、ぢやア今日は此まよ一まづ歸りまして、また明日、あらためて伺ひませう、その節に先生、なほ悉しく」

「よろしい、死に就むの方法も相談に乗らう、また秘密を聞て書く人間も随分、世話しやう、なアに實のところ盜賊は罪惡の最も重いもんでない、だど自己が働かずに他人の所有を無斷で占領するといふに止まるんだ、白狀の仕方と書き方に依ては立派な社會學の一端に供

し得らるよよ、はよよよ」

*

*

*

*

*

*

*

*

煩悶はんもんの世よの中に於おける煩悶病院はんもんびやういん、ますく繁昌はんじやうを極めて不祥ふじやうの現實げんじついよく際限さいげんなく、いかに大島院長おほしまるんちやうと塚原副院長つかはらふくりんちやうの健在けんざいを以もつてするも到底たうていその數かずに應おずる能あたはず、勢いきほひ更に天下てんかの同情者じやうじやに訴うへし結果けつぐわ、こゝに分院設立ぶんいんせつりつの擴張くわくちやう説せつありと傳つたへられぬ、

浪六全集 第拾七篇(終)

大正九年十月一日印刷
大正九年十月五日發行

著者 村上

東京市日本橋區本石町三丁目十四番地

發行者 加島虎吉

東京市本所區番場町四番地

印刷者 田中三郎

印刷所 凸版印刷株式會社

不許複製製

『浪六全集第七篇』

定價金貳圓

發兌

東京市日本橋區
本石町三丁目
東京市日本橋區
人形町通住吉町
東京市本郷區
本富士町二番地

電話本局長三六六番二一六七番
振替貯金口座東京一七四四番
電話濱町一九四九番
振替貯金口座東京一六三六番
電話下谷二五〇二番
振替貯金口座東京一六九四番

至誠堂書店
至誠堂第一分店
至誠堂第二分店

井上十吉先生畢生

本辭典出初てめ英學

井上英大辭典

◆原稿用紙百五十萬枚
◆校正廿校以上卅校
◆危然參千壹百餘頁
◆多語數五拾萬
|| 誤植絶無 || 製版
頗る巧緻鮮明なり

◎縦六寸三分 ◎横三寸五分
◎新式活字 ◎總クローズ製
定價金八圓 郵税廿四錢

本辭典出の現依り現

曩に井上先生英和大辭典の大著を公にして現代英學界に一新紀元を劃したるは諸君の均しく認識せらるゝ處なり。本辭典は前書の姉妹書として粒々辛苦の結果漸く完成を告げたる現代英學界空前絶後の一大貢獻にして前書と併立して日月並び懸るの壯觀を現出したるものと云ふべく、其の内容の偉大なる宇宙森羅萬象苟も文字を以て表はし得る限りの語句は悉く網羅し、巧妙

過去の英和辭典を一然決

の大業完成す

界の自由郷理想境は茲に開拓されたり

本書編纂の爲に官を辭したる著者の意氣と苦心を想へ

本書は未だ曾て何人も企及し能はざりし日英兩語の完全なる融合を遂行し、和英辭書の總べての必要條件を悉く備へたるものにして、正に一切の和英辭書の集大成とも云ふべく、實に空前絶後、斷じて他人の模倣追従を許さず。其實質と價值は永久にして絶對無限、卓然として最高の權威を無窮に保有する大著なり。苟も英語を修めて其正確を期し、蘊奥を究むるの速ならんことを希ふの士は、過去の辭典を一擲して本書に來れ。是れ實に忠實眞摯なる士の現前に執るべき態度也。

代英學界は急速の進歩を感ぜし

斬新なる合理的編纂法を以て排列し檢索の至便等曾て其比を見ず。譯語の正確劃切なるは著者の獨擅場にして故事成句慣用句を悉く集め英譯法の正範たるべき文例を豊富にし日本語脈と英語脈との融合を遂行したる等未だ曾て本辭典の如く完璧に達せる理想的大辭典はあらず。試みに一本を手にせば本書が如何に類書に卓然として傑出せるかを認め得べし。苟も英語を修め其正確を期し蘊奥を究むるの速ならんことを希ふの士は過去の類書を一擲して本書に就かざるべからず。

擲して本辭典の權威感に信賴を捧げよ

浪六先生傑作

裏と表

勞働問題を取扱へる傑作!

一枚の紙にも裏と表とあり、ま
して複雑なる社會の無きも
いはちこれに裏と表の無きも
の表裏を究めんとして、人生の
會の悲劇の裡に悲痛哀艱、痛快
壯絶の幾場面を紙上に描出した
り、興味津津たる近來の快小説
として必讀を乞ふ。

菊版上製金册各拾錢
美製後圓貳各稅郵
前編後圓貳各稅郵
中編後圓貳各稅郵
編五圓拾錢

裸體の人間

文明の粧飾を悉く剃ぎとりて「裸體の人間」こゝに出
でたり製本また總ての無用なる粧飾を廢して趣味と
實益の兩方面より内容を充實せしむ。浪六先生近來
の傑作人間あらゆる階級に薦む。

四六版上製全壹册
紙數四百餘頁
定價金八圓
郵稅金八錢

浪六先生著

天眼通

痛快輕妙の筆
致奔放自在の
想は天馬の空
を行くが如し

小説としては殆ど十年ぶりの
新作にして、所謂浪六式を遺憾な
く發揮せるもの、痛快深刻の極。

前編定價金壹圓八拾錢
中編定價金壹圓八拾錢
後編定價金壹圓八拾錢
郵送料各金八拾錢

川徳

時勢は無遠慮に内容薄弱の小説界を一掃して、新たに本書を讀者諸君に薦む。

前編定價金壹圓八拾錢
後編定價金壹圓八拾錢
郵送料各金八拾錢

浪六先生著

□四六判上製美本 □定價壹圓八十錢
□紙數三百數十頁 □郵送料金八錢

出 放 題

輕快口を衝いて出づる著者
一流の樂天的放語を聞け!!

世の中に遠慮會釋
もなく、思ふまゝ、
を八方八ッ當りに
吐き出したるも
の、著者の遺憾な
き本領こゝに在り

我 五 十 年

四六判特製美裝
紙數四百六十餘頁
定價金貳圓五拾錢
郵 稅 金 拾 錢

□ 繪
著者自書自畫
コロタイプ珍品
十數葉

事實は小説よりも奇なりと云ふ語は始めて浪六先生の
「我五十年」に證明せらる、生れて今日に至るまで人生の
波瀾を極めし先生の一代記を最も大膽に最も露骨に告白
せるもの、机上の筆を以て書きしにあらず、現在の身を
以て著はせる五十年間の生證文にして所謂文士なるもの
の自敘傳にあらず。

71
1
489

終

